

平成30年4月1日
防衛大学校同窓会機関紙

小原台だより



V o l . 2 5
電子版第3号

CONTENTS

■ 防衛大学校同窓会長からのご挨拶	3
■ 平成30年度新春國分学校長に聞く	5
■ 会長ルーム・活動録	
平成29年度第3学年部隊実習激励	8
防衛大学校平成29年度開校記念祭等参加	10
■ 防衛大学校関連	
平成30年度新幹事に聞く	14
防衛大学校第65期期生会設立総会出席	17
■ 同窓生は今	
第61期生に聞く	21
今人生、男盛り（第23期生）	32
■ 活動報告	
第5期ホーム・カミングデー2（HCD2）	47
第41期ホーム・ビジット・デー（HVD）	54
平成29年度防衛大学校同窓会代議員会等（実施報告）	60
第19期ホーム・カミングデー（HCD）	65
■ 連絡事項	
平成28年度防衛大学校同窓会決算書	72
平成29年度期生会長・代議員名簿	74
平成29年度同窓会本部・支部役員名簿	76
平成29年度事務局員名簿	79
■ 電子版「小原台だより」の発刊にあたり	81

■防衛大学校同窓会長からのご挨拶



防衛大学校同窓会の皆様には、平素から同窓会の活動にご理解を頂くとともに、心温まるご支援及びご協力を賜り、心から感謝いたします。昨年４月１日から同窓会会長として勤めています杉本正彦です。（１８期海上です。）

同窓会の会員数は新規会員の６２期生を含め、２５，０６４名になりました。また、数年前には退職会員数が現役会員数をオーバーしました。４期生以上の先輩は８０歳を越えられ、期生会の「いわば終活」に対する事も今後同窓会として、しっかり考えていかねばならない時期に入ってきていると思われます。

昨年に引き続き、今年の６２期生の卒業式に同窓会としての大きなトピックがありました。

卒業式に来校され訓示された安倍総理のお言葉です。

その式典に、学校からホームカミングデー事業として招待を受け参列していた第１９期生に対し、安倍総理はこのような言われました。

「皆さんは在職中、心無い批判にさらされたかもしれません。しかし、皆さんはこれに屈することなく立派に責務を果たし、平和な日本を私たちに引き継いでくれました。

事に臨んでは危険を顧みず、身をもって責務の完遂につとめ、もって国民の負託にこたえる。この宣誓の言葉に違ふことなく、常に国民のため黙々と任務に精励してきた皆さんの姿は多くの国民の目に焼きついています。今日、実に９割の国民が、自衛隊に良い印象を持っています。これは皆さんの努力の賜物でありましょう。内閣総理大臣として心から御礼申し上げます。」と。これは単に１９期生にのみに述べられたものではなく、防大同窓生へのお言葉だと会長として認識した次第です。

平成３０年度は４月５日防衛大学校入校式に合わせて、６期生のＨＣＤ２（ホームカミングデー２）を実施し、すでに同窓会としての事業がスタートしています。同窓会の事業は例年どおりですが、「保安大学校記念碑建立」に関しましては、昨年末に各期生会長宛アンケートをとらせていただき、その結果、各期

のご賛同を得たものと判断し「平成31年3月を目途に同窓会として記念碑を建立する」事を決心致しました。

この春に卒業した62期生を含め、防衛大学校同窓会の会員は25,064名です。この内、留学生の会員は354名となります。59期生からは毎年20名を超える留学生を受け入れ、30年度までの受け入れ累計で472名になっています。今後も増加が見込まれます。

昨年、第26期卒業のタイ王国空軍司令官ジョム空軍大將が来日、来校されました。防衛大学校卒業生、同窓会のネットワークが海外にまで構築される時代になり、同窓会の存在がわが国の安全保障の観点からも極めて重要になってきていることが伺えるものと思います。海外の同窓会支部の設立及び活動についても、国内支部への支援と同様に将来の課題として考えていかねばなりません。防衛大学校同窓会としても、海外支部の設立と活動支援に協力できれば幸いです。

今年も微力ではございますが、同窓会事務局の仲間とともに一丸となって努力していく所存ですので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

■ 30年度新春國分学校長に聞く

2018. 2. 13

「新たな高み」の次へ

防衛大学校長 國分良成



防衛大学校長 國分良成

過去4～5年にわたって展開してきた「新たな高み」プロジェクトについては、これまでもこの誌面をお借りしてしばしば紹介させていただいた。このプロジェクトは様々な改革事業を含んでいたが順調に推移し、その多くが実施に移され、大枠としての完成も近づいている。そうした進展の中で、防大では「新たな高み」の次なる段階への模索が始まっている。改革の志を失えば、そこに進歩はない。絶えず現状をチェックし、再検討し、良い点は伸ばし、悪い点は改良する。組織が守ることだけ考えていたら、そこに未来はない。

まずは、その後の「新たな高み」について簡単に紹介させていただきたい。防大においてこれまで十分に重視されてこなかった研究部門を充実させるために設立されたグローバル・セキュリティ・センターは、約1.5億という潤沢な国家予算を得て順調にスタートし、平成30年度の2年目もほぼ同規模の予算を得て、内外の研究者を交えた10個の斬新な共同研究プロジェクトも軌道に乗っている。

防大の国際力強化のために設立された国際交流センターも、学生の海外派遣、留学生の受け入れ、国際士官候補生会議（ICC）の開催、海外要人の来校準備、防大首脳の海外訪問等の業務で忙しい日々が続いている。学生の知的素養強化のために設立された教養教育センターも、英語教育（TOEIC）、学外講師による課外講演、リテラシー教育等の面で大きな成果を上げている。

「新たな高み」のもとで実施された「新学生間指導」も、学生たちの「自主自律」を基本に順調に進展し、かつてに比べ悪質な事案が減り、懲戒事案も数年前に比べ約半減し、学生たちも伸び伸びと日常生活を送っている。さらに、卒業生の高齢化を勘案して、草創期の卒業生を中心に防大史の保存作業としてオーラルヒストリー（聞き取り調査）を実施している。

このような「新たな高み」プロジェクトの一つの到達点として、研究・教育のより高度化と機能化を目指して、研究科の機能を加えて、平成 30 年度から先端学術推進機構が新設される。今後、私自身も新機構に直接間接に関わることで、防大の研究・教育面の発信力をさらに強化させたいと考えている。

こうした組織改編にともなって、平成 30 年度から各研究科「主事」の名称も、意味をより明確化させるために「研究科長」に変更する。また来年度以降の検討課題であるが、「防大幹事」の呼称を、「企画・管理担当副校長」、「教育・研究担当副校長」と横並びに、「訓練・訓育担当副校長」に変更したいと考えている。歴代幹事や草創期の卒業生の方々にご意見を広くお聞きしているが、これまでのところ、この変更に対抗の立場を表明された方は一人もおられない。

「新たな高み」が終盤に近づくにつれ、防大執行部では、「世界の士官学校」を目指すためのより時間軸を伸ばした中長期計画が必要ではないかとの点で意見の一致をみており、すでにその初期的検討も始まっている。これは従来の単年度の業務計画に加え、今後のわが国経済や少子高齢化などの客観状況も踏まえ、施設や人員の構成なども含めてより中長期のビジョンと計画が必要であるとの共有認識の中から発議されたものである。そうした一連の動きの中で、教職員に提示した私なりの視点の大枠を以下に紹介したい。

第 1 に、今後とも自衛隊の中心幹部を輩出し続ける使命の重要性である。戦後、防大は自衛隊の中心幹部を供給し続けており、今後ともそれが期待される。もちろん一般大学の卒業生も不可欠だが、防大卒業生の重要性は明らかであり、今後とも優秀な中堅・最高幹部を輩出し続けなければならない。アメリカにはもちろん立派な士官学校が多く存在するが、米軍トップには ROTC 組もかなり多く、必ずしもそうした士官学校卒ではない。

第 2 に、陸・海・空の統合の原点としての防大の重要性である。世界はまさに統合時代に入っているが、わが国でも「統合機動防衛力」の重要性が指摘される。世界の士官学校はその多くが陸・海・空に分かれているが、防大は戦前の反省から一つとなった。この歴史的恩恵は自衛隊の発展にとってかけがいのないものであった。防大で寝食をともにした仲間がいったんは陸・海・空に分かれるが、統合機能の強化にともなって防大時代の人間関係のネットワークが駆使されてきた。今後とも、将来の統合機能強化に配慮した様々な工夫が防大教育に必要であろう。

第 3 に、今後とも優秀な幹部自衛官を輩出するために、知的に武装された人材を育成することに重点を置かねばならない。先進諸国の軍人たちの多くが修士号はいうまでもなく、博士号を取得している。日本ではまだまだそうした面での制度が弱い。その点で、防大でも研究科（大学院）の充実が一層図られる

べきである。修士を1年で修了するケースが増えてきているが、こうした試みは大事である。また本科においても、今後とも文理融合型の授業を増やすべきであり、宇宙やサイバーなどの新領域に配慮した科目編成も重要である。

第4に、グローバル思考の展開である。「世界一」を目指す以上、グローバル思考でなければ意味はない。過去、防大は多くの長期留学生を輩出し、現在も輩出し続けている。卒業した彼らは本国で高い評価を受けている。学生全体に占める留学生比率は、全国の大学の中でもトップクラスである。また、防大生を多く海外に派遣しなければならない。短期間でも派遣された学生は帰国後に大きな飛躍を見せている。今後の自衛官にとって、英語はもちろんのこと、若い時に広い世界を知ることが一生の財産となる。グローバル思考という点で、女性の活用も重要である。女性自衛官の意義について、防大時代から男子学生も含めてセンスを共有しておく必要があろう。

第5に、日本の美徳の涵養である。防大では自由と規律のバランスを説いているが、それは西洋流の自由・規律観と日本の精神風土との融合でもある。集団生活の重視と他者への配慮と謙譲の美徳、団体行動と秩序維持の尊重、卒業後も続く先輩・後輩と同期の絆、日常生活における清潔感と公衆マナー等、これらは日本の美徳でもあり、昨今では世界からも高い評価を受けている。今後とも、先進的価値と日本的価値の融合に配慮した教育体系が必要である。

以上において指摘した点は、もちろん今後の試行錯誤の過程で可変的なものであり、絶対的なものではない。しかもこれは大枠であり、今後求められるのは、こうしたことに基づいた具体的な構想と施策であり、施設や設備、学生・職員の人員構成なども含めて活発な議論が必要である。夢は「防大モデル」の確立と発信である。

■「会長ルーム・活動録」

平成29年度第3学年部隊実習激励

2017. 7. 14

杉本同窓会会長は、7月10日（月）海上自衛隊鹿屋航空基地で部隊実習中の防衛大学校第3学年海上要員を激励しました。鹿屋航空基地到着後、第1航空群司令を訪問、公室において鹿屋基地所在の各級指揮官を交えて懇談の後、実習中の第1航空修理隊に移動しました。39名の学生は2班に分かれて実習中であり、片方は格納庫内で部隊の概要等に関するブリーフィングを受けており、学生は真剣な眼差しで説明に耳を傾けていました。もう片方は鉾打ちの実体験中でした。実習初日ということもあり、やや硬さの見られる手つきで作業に取り組んでいました。

実習現場を後にし、会議室において当日の実習終了後の学生に対し会長から激励の講話を実施しました。講話の内容は、テロ特措法のもとでの活動等海上自衛隊の活躍を会長自らの経験に基づく説明でした。また、勤務に当たっては、「目の前にある職を果たす」こと、「勤務記録をつける」ことの大切さを強調し今後の参考となる内容でもありました。講話の終盤には、世界の海軍に共通する敵は、一つには「荒れた海」であり、もう一つが白い制服を汚す「赤ワイン」であることを紹介し、「競争相手は同期ではなく世界の海軍である」との動機づけで講話を締め括りました。

杉本会長の激励の講話を熱心に傾聴した後、学生からは「印象に残ったこと」、「信念について」や「推薦図書」などの活発な質問があり、杉本会長から丁寧な説明を返し講話は終了しました。夕刻、部隊で計画された懇親会は、部隊の同窓生のみならず、近傍在住の同窓生、基地支援団体からの参加を得て盛大に実施されました。途中、学生一人一人から抱負が発表され将来の幹部自衛官に盛大な拍手が送られました。ここにあらためて、第1航空群司令をはじめ、第1航空群司令部、鹿屋基地所在部隊及び防衛大学校訓練課の方々のご支援・ご協力に心より感謝申し上げます。

（本部事務局 総務部26期海 山本克也 記）



1空群司令（中村1佐）表敬



鹿屋所在各級指揮官同席



実習状況見学 概略説明を受ける学生



鉚打ちをする学生



実習学生激励 会長の講話を聴く学生



会長に質問をする学生



懇親会 来賓あいさつ



学生に囲まれる会長

■「会長ルーム・活動録」

防衛大学校平成29年度開校記念祭等参加

2017.11.15

11月11日（土）～12日（日）の2日間にわたり、杉本同窓会長は防衛大学校で実施された第65回開校記念祭等の行事に参加しました。

11日には、本館大会議室において同窓会会食を主催するとともに、顕彰碑献花式に参加しました。

同窓会会食は、顕彰碑献花式に先立ち同窓会総務部長の司会で行われました。國分学校長をはじめ、各幕僚長代理などの来賓を迎え、各期代表が参加して、顕彰者に対する感謝と敬意の気持ちを込めて和やかに会食を行いました。

次いで、人文科学館南側顕彰碑において、顕彰碑献花式に参列し、100柱の御霊に哀悼の誠を捧げました。本年度は新たな顕彰者はなく、厳粛に式が挙行される中、國分学校長に引き続き同窓会長が顕彰の辞を奉読し、御霊の安らかならんことと、御遺族の健勝を祈念しました。

12日には、記念式典・観閲式、祝賀会食、第41期ホーム・ビジット・デイ（HVD）に参加しました。

記念式典・観閲式では、学校長から開校65年を迎え「より高みを目指し世界の士官学校へ」との式辞があり、第62～65期の学生による威風堂々たる観閲行進が行われました。この際、卒業生を中心とした飛行部隊による祝賀飛行が式典に花を添えました。

祝賀会食は、内外から多数の来賓を迎えて学生食堂で行われました。同窓会長は同窓会活動の一端を紹介するとともに防衛大学校の発展を祈念して万歳三唱を行い、祝賀会食は盛会のうちにお開きとなりました。

引き続き、学生会館に移動し、第41期生の卒業20周年を祝うHVDに参加しました。同窓会長は自衛隊の中核たる時期を迎えた第41期生に対し「仕事をしっかりする、家族を大事にする、後輩を育成する、ことを要望する。」と激励し、御家族を含めた歓談を行い、これまでの労を讃えるとともに今後の活躍を祈念しました。

この後、防大名物の「棒倒し」において、各大隊一丸となった応援と激しい戦いを観戦し、勇壮な防大の伝統が継承されていることを確認しました。

防衛大学校では今年度の統一テーマを「昇華～ここにしかないもの」とし、各校友会の活動を始め、本の紹介で知性を競う「ビブリオバトル」や「受験生

と学生との懇談」など多くの企画や行事を行っており、これまでより更に充実させるとの思いが強く感じられる開校記念祭でした。

(本部事務局 総務部 27期陸 星指隆 記)



同窓会会食主催者（同窓会長）挨拶



同窓会会食に参加した各期生会長



学校長顕彰の辞



同窓会長顕彰の辞



献花する同窓会長



来賓・各期生会長



祈念式典・観閲式の整列



学生による観閲行進



祝賀会食学校長挨拶



祝賀会食同窓会長の万歳三唱



HVD同窓会長激励の言葉



HVDの第41期生参加者



棒倒し～開始の態勢



優勝2大隊、準優勝4大隊

■防衛大学校関連

新幹事に聞く

2018. 2. 2

「世界一の士官学校を目指して」

防衛大学校 幹事

陸将 上尾 秀樹（29期・陸上）



全国の防衛大学校同窓会の皆様、こんにちは。私は、昨年8月に第49代幹事として着任致しました29期生の上尾（あがりお）です。自衛隊生活の原点ともいべき防衛大学校に幹事として勤務できますことを大いなる喜びとし、その重責を全うし得るよう、全身全霊を尽くす所存です。今後とも、御指導・御鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

さて、防衛大学校は、國分良成学校長をお迎えして、まもなく6年となります。学校長は、「全ては学生のために」をモットーに、「世界一の士官学校」を目指して「新たな高みプロジェクト」による、機構改革を含む各種の改革に取り組んでおられます。このような改革の成果もあり、30年ぶりに見た防衛大学校は、様々な面で変化、否、進化の途上であるという印象です。そこで本稿では、防衛大学校の現状と今感じていることについて申し述べてみたいと思います。

1 学生舎生活

学生舎における編成等も、当初の各学年混成8人部屋から、我々のような学年別4人部屋、2人部屋、等々、変遷を経て、現在は各学年混成8人部屋となっています。

この間、様々な事案も発生し、学生間指導を禁止した時期もあったと聞いています。現在は、各種事案の発生、コンプライアンスに係る意識の変化等を踏まえ、平成27年1月から、「学生間指導のあり方」を明示して、今の時代に適合した「部隊の隊員指導としても通用する、被指導者を粘り強く教え導く。」要領を徹底し、「厳しさの中にも、絆が育まれるような温かみのある」学生舎生活を送れるよう指導しています。

現在の4学年は、1学年の途中からこの指導を受けており、そのこともあ

ってか、今年度に入ってから、不適切な指導による懲戒事案も減少傾向にあります。一方で、学生の躰・マナー等、建学時から重視されている事項が、十分に学生に根付いていないのではないかと危惧しています。訓練部も同じ問題意識を持ち、指導教官に対する指導をはじめとする各種施策を実施し、「武人にして真の紳士」たるべく、一意その徹底に努めているところです。

2 校友会活動

学生の3本柱の一つである校友会活動ですが、我々の頃に比べると練習等に充当できる時間が限られ、9時限目を含む1630～1830までの最大2時間となっています。このように時間的な制約はあるものの、学生諸君は、各種の工夫をしつつ、熱心に活動に取り組んでいます。

学生時代に所属していたラグビー部を例にとりますと、1試合に必要な走力等のスタミナ・スピード及びコンタクトプレーで必要とする筋力を詳細に把握し、これに応じたトレーニングを科学的に実施しています。筋力トレーニングも闇雲に実施するのではなく、シーズン中においても2日に1回とし、定期的な筋力測定の数値に基づき実施するという徹底振りです。さらには、筋力を効果的に向上させるとともに、疲労を回復させるため、必要な栄養を摂取できるよう練習の前後等にプロテインやバナナ・おにぎり・オレンジジュース等を補食しています。当然、優秀な指導者がいるからこそその科学的トレーニングですが、様々な工夫により時間の制約を克服しつつ、チーム力強化に主体的に取り組むことは、学生諸君にとって、今後の大きな財産になるものと思います。

3 教育・訓練・研究体制

30年ぶりの防衛大学校は、施設の面で見違える状態でした。学生時代の施設で残っているのは、理工学館、防衛学館、総合体育館及び学生会館くらいで、多くは新しい施設に替わっています。

現在も、新理工学館A棟の建替整備を実施中で、平成40年頃を目途に5棟の現理工学館と防衛学館を4棟の新理工学館に順次建替整備する計画となっています。また、学生教育1号棟～3号棟（旧6号舎～8号舎）の耐震改修、内装・外壁改修にも着手しており、教育・訓練に関する環境整備を計画的に進めています。

一方で、学生舎における修学環境は、決して満足のいくものではないと感じています。特に、机等の備品や被服については、世界の士官学校を目指し、真の紳士・淑女を標榜するに相応しいものとなるよう、計画的な更新が必要だと認識しています。また、回廊状という学生舎の特性から風通しが悪

く、エアコンの使用時間も限定されるため、夏季における修学環境は劣悪ですが、こういった点も、今後の検討課題であると認識しています。

4 国際化

これからの幹部自衛官に必要な国際性を身につけさせるとともに、防衛交流の一環として留学生の派遣及び受入を積極的に行っています。本科への留学生は、タイ王国及びシンガポールの他、インドネシア、ベトナム、モンゴル、韓国、カンボジア、フィリピン、東ティモール、ラオス、ミャンマーの計11ヶ国を毎年受け入れています。また、外国士官候補生の研修として、約4ヶ月の長期コースに米国、フランス、オース

トラリアを、約1週間の短期コースに米国、ロシア、インド、オーストラリア、韓国、タイ、シンガポール、カナダ、ブラジルを受け入れています。

一方、防衛大学校からの約4ヶ月から1年の長期派遣では、米国、フランス、韓国、ドイツ、オーストラリア、カタールの6ヶ国に20名を、短期の約1週間から3週間の派遣では、米国、タイ、インド、カナダ、シンガポール、ブラジル、ロシア、中国の8ヶ国に38名を派遣しています。

我々の頃とは異なり研修等の機会も派遣人員も増えていますが、より一層の充実を図るため、米国への派遣期間の長期化についても検討を進めることとしています。

また、全学生に実施しているTOEICですが、ほぼ右肩上がりで成績は向上しています。全学生の平均は、23年度が432点、26年が462点、29年が483点となっています。在校している4学年から2学年は、学年が上がるごとに平均点が向上しており、今後の伸展が楽しみです。

以上、防衛大学校の現状と簡単な所見を申し述べましたが、「鍛えれば鍛えるだけ、それに応えてくれる。」学生達だけに、これからも着実に成長できるよう指導して参りたいと思っています。

同窓会の皆様、今後とも、御指導の程、よろしくお願いいたします。

■防衛大学校関連

防衛大学校第65期期生会設立総会出席

2018. 3. 22

岩崎茂・防衛大学校同窓会副会長は平成30年3月8日（木）、防衛大学校第65期生の期生会設立総会に出席、祝辞を述べるとともに、第65期生会会長に支援金を手渡しました。

期生会設立総会は、65期生総員が一同に会し（設立総会時現在、総員458名、うち女子59名、留学生23名）、各学生に今後活動を開始する65期生会の一員であることを認識させるとともに、以後の防衛大学校生活及びその先を見据えた同期生間での団結を図ることを目的に行われました。

総会に先立ち、岩崎副会長は、國分良成学校長、石塚副校長、渡邊副校長、上尾幹事、俵訓練部長、森迫防大同窓会小原台事務局副局長と懇談しました。懇談では、この春小原台を去られる渡邊副校長と同期である岩崎副会長が学生時代の話などをし、現在の防大との比較などが話題となりました。

11時から期生会設立総会が記念講堂において実施され、第65期期生会吉田敦会長以下9名の役員紹介に引き続き、第65期期生会会長による所信表明が行われました。この中で吉田会長は、「自分は65期全員にかかわる大きな仕事をしたいと思い会長選に立候補した。この思いは今も変わらないし、役員とともに、今までの期生会でやってこなかったようなことを積極的に進めていこうと考えている。何より65期で良かったと心の底から思えるような期生会を目指し、自分らの期を誇りに思えるよう頑張っていきたい。」と力強く所信を述べました。

これに対し國分学校長が、「第65期期生会発足おめでとう。私はよく言う事だが、一般大学40年の経験を踏まえても防大は日本一の学校ではないかと思っている。知性を磨くだけでなく、体力も鍛え、人間的な深みを育む学校だ。一般にはない学生の意見を聞くという学校でもあり、こんな学校は他にない。諸君にはこの学校を作るということを引き続き努力して欲しい。精神が豊かな人は、周りにいい意味でとてつもなく変わった人がたくさんいると思う。本日お越しいただいた岩崎副会長もまたその一人であり、東日本大震災時に空幕長としてご活躍されたすばらしい個性を持たれた同窓の先輩である。諸君は先輩を見習い将来にわたり同期と大きな絆を作ってもらいたい」と、祝辞を述べられました。

続いて岩崎同窓会副会長が、「昨春の入校式から１年近くが過ぎ、その時、國分学校長が同期の絆ということをお話されたことを思い出した。皆が同じような苦労を経験し初めて同期の絆が生まれる。４０数年経った今、同期の絆の素晴らしさは本当に身に染みて感じている。自衛隊は、現在統合運用を実施している。統合運用開始の平成１８年当時、米軍からは、統合運用については数年でできるようなものではなく、１０年２０年３０年とかけてもなかなかうまくいかないものであると言われていた。しかし統合運用は５年後の東日本大震災時、２０期の東北方面総監君塚陸将を統合任務部隊指揮官とし、ものの見事にこれをやってのけた。その後もいろいろな局面で統合運用を実施している。私はその統合運用が上手くいっている要因の一つは、この防大にあるのではないかと考えている。もちろん一般大等出身の幹部も頑張っているわけではあるが、４年間ここ小原台で学び、知力体力を鍛えているこの環境がそれを作っていることと思う。最後に今日、吉田期生会長が話していたが、是非同期で良かったと思うような絆を作ってもらいたいと願っている。本日は本当におめでとう。」と、祝辞を述べられました。引き続き、岩崎副会長から第６５期期生会会長に対して、防衛大学校同窓会からの支援金が手渡されました。

式の締めくくりとして、防衛大学校学生歌を全員で合唱して、設立総会は終了しました。

１２時から学生食堂において行われた第６５期期生会発足記念会食では、國分学校長、岩崎同窓会副会長のほか、防大の主要幹部が来賓として参加し、この中で卒業を間近に控えた４学年の第６２期期生会長上中学生が「卒業する私から伝えたい事は、後輩を大切にしたいということ。そして伝統を大切にしたいという事だ。油断大敵という言葉がある。語源は、比叡山延暦寺の根本中堂内に不滅の法灯であるという。法灯は最澄が灯して以来、１２００年以上一度も消えることなく燃え続けている。このように代々引き継がれた灯を誰かしらが引き継ぐ。防大に当てはめるとそれは伝統だと思う。そして伝統は防大生自身ではないだろうか。岡部元幹事が講演の中で、防大は皆の心にあるといわれた。防大の伝統は皆の心の中で受け継がれる。そのことを思い学生生活を続けて欲しい。６５期期生会のみんな発足おめでとう。」と祝辞を述べられました。その後、吉田期生会長から挨拶があり、６５期森学生が制作した「期待の人が俺たちならば」というタイトルの入校から１年間の記念動画が披露され、皆感慨深くそれを見ていました。この会食をもって６５期期生会設立総会等全ての行事は終了しました。

(本部事務局 人事部 ２７期空 穂積文孝 記)



設立総会前の懇談



第65期期生会創立総会



所信表明する吉田会長



國分学校長の祝辞



岩崎副会長の祝辞



岩崎副会長から支援金授与



学生との記念会食

■同窓生は今

第61期生に聞く（その1）

2018.01.18

「理想の指揮官」

陸上自衛隊幹部候補生学校
第4候補生隊第5区隊
幹部候補生陸曹長 二村 圭



現在、陸上自衛隊幹部候補生学校第98期一般幹部候補生（BU）課程に入校中の防衛大学校本科第61期卒業生、二村候補生です。

私たちは心の故郷、前川原の地に足を踏み入れた3月29日から早くも半年が過ぎました。様々な失敗を繰り返しながら、激動の日々の中、訓練や各種検定を通して同期との団結を深め、一人では決して乗り越えることの出来ない困難を乗り越えてきました。幹部候補生学校と防衛大学校との違いは、上級生や下級生という関係ではなく、同期で同じ目標に向かう中で励まし、助け合い、時には衝突をしながら切磋琢磨していくことで、同期との絆がよりいっそう深まる事です。特に訓練においては、50km行進や総合訓練といった自身の限界に挑戦する訓練や、高良山走検定や藤山武装障害走検定における競技会において区隊優勝に向けて厳しい練成を行う等、一つの目標に向かって力を合わせることで同期との絆がよりいっそう深まります。また、各係業務や小隊長等の三役勤務では各人が自分の職務の責任を果たすことで初めて区隊の目標が達成できる事を理解し、それに向かって区隊員が一丸となって努力を行い、目標を達成することで団結することができます。

こうした幹部候補生学校での訓練や教育を受けることで得た、自分なりの理想の指揮官を述べさせていただきます。防衛大学校を卒業した際には、まだ具体的な小隊長の理想像ははっきりとしていませんでした。しかし、各係業務や三役勤務等の日々の修学に取り組んでいくうちに、自ら設定した目標に取り組み、背中で見せて率先垂範していくことが大切だと感じました。良い意味で周りを巻き込んで区隊を同じ方向に向かせることで、団結が深まり任務を完遂できると感じました。部隊が任務を完遂するためには、上司・同僚や部下が相互に心から信頼しあえる部隊を作っていくことが重要であり、そうした部隊を育成できる人が理想の指揮官であると考えます。こうした部隊を作っていくには、各人が日々の生活において自分のために動くのではなく、部隊の任務完遂のために自分がどのように寄与できるのか、それに向かい仲間と団結・協力してど

のように取り組んでいくのかを考えることが必要です。理想の指揮官になるためには、確固たる意志と情熱をもって、隊員と苦楽を共にして部隊の団結を深めることが重要だと考えます。団結を深める上で、その核心となり部隊を率いていくのは指揮官であり、全ての人格をもって良好な統御のもと指揮をしていかなければなりません。そのためには、指揮官として与えられた任務は必ずやり遂げるという情熱を持ち、様々な困難を乗り越える中で仲間の信頼関係を高め合い、隊員を同じ方向へと向かわせることが重要です。将来の私たちが指揮官として部隊を指揮する上で、上司・同僚や部下が相互に心から信頼しあえる部隊作っていくことが重要であり、そうした部隊を育成できる人が理想の指揮官であると考えます。

最後に、幹部候補生学校には訓練や日々の業務を通して指揮官としての資質や識能を成長できる環境が整っています。しかし、これを生かすには自ら考えて行動することが欠かせません。防衛大学校において自主的に動いて失敗を恐れず、競技会、校友会、勤務等に積極的に取り組むことが幹部候補生学校で成長することに繋がります。幹部候補生学校での修学も残りわずかの期間となりましたが、今後の総合訓練では区隊員全員で団結して任務を完遂し、また、部隊赴任では失敗することを恐れずに、謙虚に積極性をもって取り組むことで、理想の指揮官となれるように精進していきたいと思います。



第61期生に聞く（その2）

2018.01.18

「幹部候補生学校入校前の後輩に伝えたいこと」

陸上自衛隊幹部候補生学校

第3候補生隊第2区隊

幹部候補生陸曹長 池上 好古



現在、陸上自衛隊幹部候補生学校・第98期一般幹部候補生BU過程に入校中の防衛大学校本科第61期卒業生、池上好古候補生です。

3月28日、期待と不安を胸に幹部候補生学校の門をくぐったあの日から早くも8ヶ月も過ぎ、部隊に配属される日も少しずつ近くなってきました。幹部候補生学校での生活は、防衛大学校での生活と多くの点で異なります。小部隊指揮官として必要な知識及び技能に重点を置いており、日々学ぶことが部隊勤務に直結していることが実感できます。実員指揮を重視した戦闘・戦技訓練に加え、戦術や戦史、防衛教養といった幹部として必要な識能教育、伝統ある高良山登山走、藤山武装障害走等の体育訓練を行っており、それらを通じて幹部自衛官として必要な資質を涵養することが求められています。今回小原台だよりに寄稿する機会を頂きましたので、ここ幹部候補生学校で生活してきた中で後輩に伝えたいことをこの場をお借りしまして述べさせていただきます。1点目は「将来の部下のために」という点に関して、2点目は「同期の絆」について、3点目は「失敗を恐れないこと」についてです。

我々は近い将来必ず部下を持ち、初級幹部として小部隊の指揮官になります。幹部候補生学校では初級幹部としての職務を遂行するために必要な知識や技能を修得するためのカリキュラムが抜かりなく組まれています。卒業時には必要な教育を一通り終えたこととなります。しかし、それに安心してはいけないのではないかと考えるようになりました。ここで大切な考え方こそが「将来の部下のために」ということです。これを考えている者とそうでない者では差が生まれます。例えば戦術の課目に対して、部下のために多くを学ぼうと心掛けて日頃から教官に質問をしてきた者と試験の対策のみを行ったものでは卒業時に埋め難い差があるのです。体育訓練から日常起居まで全てにこの考え方が適応できます。部下は上官を選べないという言葉もあるように、卒業すれば否応なしに部下を持つこととなります。その将来の部下のために少しでも多く学び、体力をつけ、資質を涵養しようとすることが私の向上心に繋がります。

した。部隊での経験がない我々BU課程にとって卒業までにここまで出来れば充分小隊長が出来るという基準はありません。10ヶ月間という期間を有意義に使い将来の部下のために成長を求め続ける心が必要です。

2点目は「同期の絆」に関してです。過酷な訓練や厳しい生活の中で支えとなり、励ましてくれるのは同期です。私はここでの教育の中で一人の力の無力さと同期と協力すれば大きなことを成し遂げられることを学びました。尊敬すべき同期も数多くいます。時には意見の違いでぶつかることもありますが、同期と共に過ごすことで自分を見つめ直すことも出来ます。自分が苦しいときでも周りの同期のために行動できる人は信頼されます。同期の絆は卒業したあとも弱まることなく続く強固な絆です。是非、同期の重要性に自分で気付き大切にしてほしいと思います。さらに幹部候補生学校では、防衛大学校からの同期に加え、一般大学卒業のU課程と共に教育を受けます。彼らは防衛大学校では経験できないような社会経験を積んでおり交流の中で多くのことを学ぶことができます。さらに課程は違いますがI課程、MD課程、N課程も同じ時期に学ぶ紛れもない同期です。経験や立場の違う同期との交流は、自身の視野を幅広いものにしてくれます。

3点目は「失敗を恐れないこと」です。私は入校祝賀会食の際に失敗を恐れずに失敗から多くを学ぶ心づもりで生活したいと抱負を述べました。それは今でも心掛けていることであり、心の支えたるものです。候補生の間はどれだけ失敗しても構いません。失敗を反省し部隊勤務に生かせれば、その失敗は意味のあるものになります。失敗すること＝恥ずかしいことだと考えず、「失敗してもいいや」と楽観しつつも、与えられた課題に試行錯誤しながら取り組むことで、本物の経験になるのだと実感しました。誰もしたことのない小隊長動作をする時、戦術の授業で発表する時など是非自分から手を挙げて失敗してみてください。その姿勢が大切です。

幹部候補生学校での生活も残すところあと1ヶ月程になりました。小原台だよりに寄稿させて頂いたこの機会にまた自分自身の生活態度を見つめ直し、卒業までの期間を有意義なものにしようと思いました。私の経験が少しでもお役に立てれば幸いです。



第61期生に聞く（その3）

2018.01.18

「原点としての防大」

海上自衛隊幹部候補生学校

第1学生隊 第5分隊

幹部候補生海曹長 神作 友陽



去る3月19日、4年間の思い出を胸に防大を巣立ったあの日から、早くも半年以上の月日が過ぎました。

江田島の海上自衛隊幹部候補生学校（以下、江田島）に着任以来、球技競技会、8マイル遠泳、通信競技会、遠漕競技会のほか、帆走・幕営訓練や陸上戦闘訓練など様々な行事を乗り越えてきました。これ以外にも、弥山登山競技や短艇競技、持続走競技も控えており、江田島ではさながら防大四年間を凝縮したような密度の濃い日々を送っています。帝国海軍から続く伝統あるこの江田島の地で、私たち防大61期生は、初級の幹部自衛官として必要な知識及び技能を習得し、かつ強靱な体力と精神力を養うために日々修養を続けております。こうした忙しくも充実した日々を送るなかで、防大で過ごした日々が懐かしく思われる日もあります。

防大では「自主自律」が建学の精神として謳われており、全学生が防大生として在るべき姿を追求しながら日々の修養にあたっていることと思います。私自身、学生隊学生長としてこの言葉の意味するところを考えながら勤務にあたっていました。しかし、江田島での生活が始まると、自主自律を追求していた防大での日々の疑問を感じるようになりました。なぜでしょうか。それは江田島での生活が極めて他律的なものに感じられたからです。

江田島には幹事付と呼ばれる若手士官が、候補生の服務指導を厳しく行っています。毎日のベツメイクにプレス、清掃といった細かい起居容儀を指導されることで防大一学年時の記憶が蘇ると同時に、幹事付に指導されるか否かが候補生の行動基準になっていました。この時点では、候補生としての在るべき姿を追求するという意識が希薄になっていたのです。しかし、学生長として勤務していく中で、江田島での生活においても、自主自律の精神が存在していることに気付かされました。例えば、幹事付から行進の練度が低いと補備訓練を行うという指導を受けたことがありました。入校当初はその指導通りに、幹事付が主導する補備訓練を受けていました。これでは行進の練度不足という問

題を候補生の手で解決したことにはならず、幹事付の手によって強制的に補備訓練をさせられたという意識が残ります。しかし、候補生の中から行進訓練を自分達で実施して練度を上げようという意見が次第に挙がるようになりました。この意見を踏まえて、私たちは自分達で行進訓練の計画を立案し、それを幹事付と調整したうえで実施しました。これは自主自律の一つの形態であると考えます。そして、候補生に任せておいても在るべき姿を追求できると判断した幹事付は、それ以降、行進に関して他律的な指導を行わなくなりました。

このように、江田島においても自主自律は追求されているのです。幹事付に指導されたくないという矮小な考えに埋没するのではなく、より高次の段階から物事を捉え、候補生としての在るべき姿は何かを追求していく姿勢が肝要だと考えます。そして、この自主自律の姿勢はそのまま部隊配属後にも生きるものでもあるのです。

昨今の国際情勢から、我が国を取り巻く安全保障環境が厳しさを増しているのは誰の目にも明らかです。それは即ち、私たち候補生が江田島を巣立ち部隊に着任すると同時に実任務に就くという状況が考えられるということです。中国による攻勢的な海洋進出や北朝鮮による相次ぐミサイル発射という緊迫した国際情勢において、部隊を率いていく士官には冷静で正しい情勢判断を行い、最適な決断を下すという重責が課せられます。そうした緊迫した環境下で、自分を取り乱さずに士官としての務めを果たすには、防大時代から学んでいる自主自律の追求が必須です。士官として自分はどうあるべきなのか。その理想像に近づくためには何をすべきなのか。問題を抽出し、理想との乖離を分析して適切なアプローチを講ずるという問題把握能力と企画力は、一朝一夕で得られるものではありません。防大在学時から、自身の生活を振り返り、理想に近づけていくための努力を惜しまない日々の自己陶冶が求められているのではないのでしょうか。

防大生の皆さんには、今一度、自分が防大生としてどうあるべきで、何をすべきなのかをしっかりと考えてみてほしいと思います。抽象的で難しいと感じる場合は、幹部自衛官としてどのような仕事をしたいのかといった具体的な襲来の姿をイメージしてみてください。そうした理想像に近づくための努力が皆さんを着実に成長させ、将来幹部自衛官として大事を成すに至るのです。教育・訓練、学生舎生活、校友会活動、その全てに妥協することなく真摯に取り組み、人として大きく成長してほしいと思います。防大での修養の日々は、幹部候補生学校やその先のステージである部隊でも必ず生きてくると私は確信しています。成長した皆さんと部隊で再会できるのを楽しみにしています。



■同窓生は今

第61期生に聞く（その4）

2018.01.18

「幹部候補生学校卒業にあたって」

航空自衛隊幹部候補生学校

1中隊1区隊

幹部候補生空曹長 工藤 将人



全国の諸先輩方及び同期生の諸官におかれましては、日々の任務にご活躍のこととお慶び申し上げます。航空自衛隊幹部候補生第107期一般幹部候補生防大課程に入校中の防衛大学校本科第61期卒業生を代表して、工藤候補生がご挨拶申し上げます。

3月に防衛大学校を卒業したのも束の間、直に幹部候補生学校の卒業を迎えようとしております。幹部候補生学校に入校してから早くも約半年が過ぎました。半年前、航空自衛官として何もわからないまま奈良の地に到着した時は不安で一杯でありましたが、区隊長、助教及び基幹隊員の熱意ある指導により、今では幹部候補生として充実した日々を過ごしております。幹部候補生学校では「自ら考え、判断し、行動する航空士官」の教育理念を胸に勉学、訓練に励んでおります。現在、我が国を取り巻く安全保障環境は不安定であり、このような時代に幹部自衛官として自衛隊の中樞を担うことになる私たちには、正に自ら考え判断し行動することが求められます。したがって、その基盤を築けるように一日一日を無駄にすることなく尽力しています。また、このように課程期間に臨めるのは、区隊長、助教及び基幹隊員の方々からのご支援あつてのことであり、その感謝を忘れることなく立派な幹部自衛官になることで恩返しできるように心がけております。

今回「小原台だより」へ寄稿するにあたり、以下の2点を述べさせていただきます。1点目は「幹部候補生学校で学び感じたこと及び部隊で勤務するにあたりその意気込み」であり、2点目は「防衛大学校在学中の後輩諸官への一言」です。

まず、幹部候補生学校で学び感じたこと及び部隊で勤務するにあたりその意気込みについてです。幹部候補生学校では教育理念でもあるように、自ら考え判断し、行動することが求められます。つまり、何事においても論理的な思考が欠かせないということです。そこで私が学び感じたことは、物事を考えるうえで主観的になってはいけないということです。物事を考えるうえで、大半の

人間は主観的になりがちです。しかしながら、自分の考えに固執しては思考が偏ったものになってしまいます。したがって、色々な人の考えも織り交ぜながら大局的に考えることの重要性を、身をもって学びました。また、一人では解決できないことも仲間と一緒にであれば解決できます。幹部候補生学校では同期とともに悩み考え様々な困難を乗り越えてきました。このように同期と支えあい力を合わせることで身をもって同期の大切さを感じました。幹部候補生学校を卒業すると、その同期とは離れ離れになり部隊で勤務することになります。そこでは、幹部自衛官としてより高度な問題に直面し、さらに考える機会が増えると思います。しかしながらそこには幹部候補生学校のように同期がいるわけではありません。そういう時こそ、幹部自衛官として威張るのではなく、部隊を熟知しているベテランの部下隊員や先輩方から素直に教を乞うて、自分の思考の糧とし、幹部候補生学校で学んだ論理的な思考をもって乗り越えていきたいと思っています。

次に、防衛大学校在学中の後輩諸官への一言です。防衛大学校では、陸、海、空それぞれの要員と共に生活をしています。しかしながら、防衛大学校を卒業すると、幹部候補生学校では自分の要員の同期としばらく生活することになりますが、普段当たり前のように共に生活していた他の要員とは離れ離れになります。幹部候補生学校を卒業すると、自分と同じ要員であっても離れ離れになります。次に会うときは、十数年後になるかもしれません。したがって、防衛大学校では、同期との関係を大切にしてください。ささいな会話でも構いません。コミュニケーションを大切にしてください。積極的に交流してください。かくいう私は人見知りであり、防衛大学校在学中は特に他大隊や他要員とは積極的に交流しませんでした。しかしながら、今後の自衛隊では統合運用がさらに重要視されることになると思います。したがって、防衛大学校で築いた同期との関係やコミュニケーションは将来の糧になります。そして、将来自分が困ったとき、同期が助けてくれるはずです。私は今、航空要員であった同期と共に幹部候補生学校で生活していますが、その中には防衛大学校時代に話したことのない同期もいました。しかしながら、幹部候補生学校で関わることで、防衛大学校在学中から話しておけば良かったと思うことが度々ありました。同期とのコミュニケーションは自分の武器になります。防衛大学校は色々な同期とコミュニケーションをとる上で非常に良い機会であると思います。

私たち61期は一足先に部隊に行きます。私たち61期一同は後輩諸官と共に勤務できる日を楽しみにしています。防衛大学校での生活を無駄にするか否かは自分次第です。防衛大学校での生活は一生に一度きりであり、二度と戻ってくることはありません。一日一日を大切に生きていきましょう。そして次会うときにお互い恥ずかしくないよう、共に自分を磨き上げていきましょう。



60km徒歩行進訓練における運用幕僚



朝礼風景



球技大会（サッカー）

今人生、男盛り（23 期—その 1）

2018. 01. 19

—OB 1 年生雑感—

陸 23 期 岩田 清文



平成 28 年 7 月に退官して約 1 年、OB として新たな道を歩き始めた者に投稿依頼がありました。聞くとによれば退官後、特徴的な道を歩んでいる方々に執筆をしていただいているとのこと、特徴はおろか実績もない身として当初は辞退したものの、期生会長の強い要請を受け、筆を執ることとしました。

1 OB としての基本とは

現役当時、後輩達に対し「死に様は生き様、悔いのない生き方をしろ」、などと偉そうに言ってきましたが、いざ退官をし、OB としてどのような生き様をすべきか、自身いろいろと思いを巡らす日々が続いています。

防大を含めると 41 年間、まさに人生の大半、それも最も意気盛んかつ活動的な時代から男盛りの時代に至るまで、人生の価値を意義付ける年月を自衛隊に世話になった身としては、単なる感謝のみならず何か恩返しをすべきとの思いを強くしています。

OB としての基本の第一は「最低限、現役に迷惑をかけない」、第二に「可能な限り現役を激励、支援する」、そして第三は「できれば現役ではできない、それも役にたつ事をやる」と考えていますが、第一、第二は当然のこととしておろそかにならないようにするものの、特に第三の基本をいかに実践するかが、恩返しの意味からも重要と認識しています。

2 現役ではできない、役に立つこととは

現役ではできない最も大きな分野は、やはり立場を踏まえた現役自衛官としての発言の分野だと思います。これは OB になったからと言って積極的に何でも発言をすべきということではなく、また現役時代それなりの職務にあった者は、当然ながら退官後も発言は熟慮すべきと考えていますが、防衛問題に関わる政治的な決定過程において、自衛隊員の立場からの思考が欠如或いは軽視され、かつ現役の立場では発言し難い場合には、その視点で物申せるのは OB でしかないと思っています。

また、国防に関わる施策の推進における現役の考えを、様々な視点から後押しするのもOBの役割と考えています。

幸いこの1年、これまで会えなかった方々に会え、行けなかった「場」に行けるようになり、交流の幅が大きく拡大しています。

「縁尋機妙 多逢聖因（えんじんきみょう たほうしょういん）」と安岡正篤師が言われるように、良い縁がさらに良い縁を尋ねて発展してゆく様は誠に妙なるものがあり、いい人に交わっていると自然と良い結果に恵まれる、との実感があります。人はできるだけいい機会、いい場所、いい人、いい書物に会うことに努力すべきと思いますが、まさにOBとして得られた時間、幅を最大限に活用して自らを練磨し続けるとともに、積極的に 防衛思想、防衛政策の普及、及び理解、協力の促進に努めて行く所存です。

この際、重要なのはOBの独りよがり、或いは時代遅れの考えに固執することなく、現役の考えをよく理解し、これをサポートすることを忘れてはならないということだと思います。このためにも、継続的に現役の考えや思いを掌握しておくとともに、情勢の変化に遅れることのないよう勉強を怠らないことが重要と認識しています。

交流の幅は国内のみならず国外も重要と思います。機会にも恵まれこの1年間で2度渡米して日米同盟の在り方を議論することができましたが、この場においても、現役ではなかなか発言が難しい、いわゆる本音の議論を交えることができたと思っています。退官将官同士においては、あらゆる視点から、一歩も二歩も踏み込んだ、時には互いの真意を真剣に確認し合う厳しい場面もあってしかるべきであり、事実このような議論ができたところであります。まさにトラック1協議(政府間)をトラック2協議(民間)において補完する意義も確認したところであり、今後も積極的に参画していく所存です。

防衛産業の一企業に入社してそろそろ1年になろうとしています、企業人としての立場を保持しながらも、上記の様な視点を忘れず、後輩のために如何にして役に立つかを学びながら実践していきたいと考えています。



3 盛りを維持するためには

現役の最終コーナーにおいて抑制していたゴルフを退官後再開し、趣味といえるレベルになるように楽しんでいます。先日あるコンペで防大1期生の大先輩と一緒にプレーさせて頂きました。年齢83歳、凜と背筋を伸ばし、18ホール全てを軽やかに歩きながら、時には小走りでプレーされる姿に、私も80歳を超えてもかくありたいと思った次第でした。

その先輩曰く「歳をとるという事は、衰えいくスピードをいかに遅らせるか、そしてそのためには鍛えることだ。頭と体の両方を鍛え続けることが重要だ」との教えを受け、後輩の役に立つための勉強を怠らず、常に頭に刺激を与えながら、趣味のゴルフとスポーツジム通いで体を鍛え続けて行こうと意を強くしているところです。

そうです。男盛りはまだ終わっておらず、また終わらせてもならず、新たな道における生き様を実践していきながら、自らを鍛えつつ男盛りを持続させて行きたいと思っています。

今人生、男盛り（23 期一その 2）

2018.01.19

―地域社会で“国難”と戦う。―

陸 23 期 末村 友幸



平成 24 年 8 月に定年を迎え、地域活動に専念しています。定年を迎えて思ったことは、防衛任務と転勤からの解放、そして今後どうやって生きていくかという事でした。

自衛隊では北海道と関東で勤務しましたが、基本は駐屯地・基地で同じ自衛隊員とともに集団で活動しながら官舎で生活をし、数年間勤務すると新たな任地に転勤して新たな任務と生活が始まるというものでした。魚に例えるとまぐろやぶりのような回遊魚的生活で同一の種の群れが日本の南から北まで大海原を回遊するようなもので、群れからはぐれないように一生懸命泳いでいた感じです。

定年すると任務と転勤がなくなり、地域で生活することになりました。回遊魚的生活から、海の底の竜宮城のような生活にその態様が一変しました。そこには鯛やヒラメなどの魚の他にカニやタコ、エビやヒトデ等多くの種類の生物が共生する複雑な世界でした。私は縁があって北海道の千歳市に終の棲家を構えましたので、ここで一生を終える多くの先輩自衛官と同じようにこの地で生きていくことにしました。

千歳市は自衛隊の駐屯地・基地が 3 つもあり、自衛隊 O B や自衛隊に係わりある人が多く、良くも悪くもちよっと変わった特色を持っています。新住民として地域に受け入れてもらうために、まずは身近なコミュニティーである町内会や自衛隊 O B で組織する隊友会への入会から始めました。

1 町内会活動

北海道の良いところは、地域の住人の皆さんは元々他所からの転入者で、特に千歳は元自衛官やその関係者が多く、よそ者を受け入れてくれる文化があるところです。しかし、そうは言っても新参者ですから地域コミュニティーに溶け込むには下働きから始めるのが鉄則だと思い、町内会の役員を勧められるまま引き受けました。町内会は地域コミュニティーの核となる団体で

すが、法的根拠がない自発的団体で、役員はボランティアです。

最初は監査委員でしたが、半年もすると自衛隊でいえば作戦幕僚にあたる総務部長という重役を引き受けることになりました。町内会は地域住民の親睦と行政の下請けのような機能を併せ持つ団体です。古くからの役員に教えるを乞いながら町内の親睦活動の企画や町内広報紙の作成等の活動を行って、希薄化する住民関

係を何とか維持存続させることに苦心する毎日です。また行政サービスの下請け的ではありますが、回覧物の配布、共同募金の集金、除雪や草刈り、資源ごみの回収等の福祉や住環境の整備を行っています。ボランティア活動のコツは「決して怒らないこと。ケンカをしたら会員が辞めて会がなくなる。」という事を学びました。

なお、高齢化社会を見据えて60歳から入会可能なもう一つの地域コミュニティである老人会にも今年から入会しました。最近、老人会は高齢化と入会者の減少が進んでおり、介護事業所と変わらないような感じの集まりになっています。私はもちろん最年少会員で、力仕事やカラオケの機械操作等を期待されていますが、高齢化社会ではもっと重要な役割を期待しても良い団体だと思っています。





2 隊友会活動

退職後、仕事については地域の自衛隊や自衛隊員を相手にする事業をやりたいと漠然と考えていたので、とりあえず自衛隊OBのコミュニティーである隊友会の千歳支部に入会しました。ここでも“役員の高齢化”と“なり手不足”が深刻で、会を手伝わせて下さいと申し出ると、すぐに受け入れてくれました。

半年間は事務所の留守番や電話当番などの下働きからはじめ、やがて事務局長をさせていただきました。

千歳支部は、全国最大の2,000名の会員数を誇る支部なので、事務局長の仕事は、会員の管理、会費の徴収、部隊や関係団体との調整、イベントの企画など事務量も多く、ボランティアですが毎日事務所に“出勤”しました。活動を通じて多くのOBとの出会いがあり、将来の隊友会について相談もしましたが、当初考えていた自衛隊相手の事業については、相棒が見つからずに未だ実行できていません。隊友会活動の活性化と合わせて自衛隊のOBが集まって千歳ならではの事業が出来ないかなあと今でも探りを入れています。

また、隊友会活動を通じて出会った先輩から勧められて、「日本の伝統と文化を守る会」に入会し、今では事務局長を引き受けさせていただいており

ます。出会いは多い方がいいので、自衛隊OBだけではなく人との出会いも大切にしています。



3 市議会議員活動

定年後、働く妻の扶養に入りながらボランティア活動をやっていましたが、27年4月に千歳市議会議員の補欠選挙が行われることになりました。OB議員を応援して防衛基盤の充実を図ることが自分の役目だと任務分析をしていたので、自らが立候補することは考えていませんでしたが、OBで立候補する人がいないということで、「自衛隊OB候補として私が出ましょう。」と誰にも相談せずに立候補を決め、準備もそこそこ、見よう見まねで選挙活動をやって結果は最下位でしたが何とか当選しました。全く無謀でした。

議員になるには公職選挙法に基づく選挙を経なければなりません。27年の補欠選挙と今年5月の本選挙を合わせて2回の選挙をやりましたが、これは今まで経験したことのない全くの別世界でした。選挙戦というくらいですから鍛えた戦術を駆使して戦えば良いのですが、重要なのは、見ず知らずの人に臆面もなく投票を依頼することに本人と家族が耐えられるかどうかです。

また、会う人が全て“票”に見えてくる感覚も異常なものです。

家族を巻き込んでの選挙戦で、妻にも街頭で一緒に頭を下げてもらったり、選挙カーに乗ってウグイス嬢もやってもらいました。本当に特別な世界です。

議会には市民生活に係わるすべての議案を審議して決定するという重要な役目があります。議会は当選回数で役職を配分する慣例があり、2回当選でやっと役職が回ってきました。ただ、国会議員と違い秘書がないので、議案の読み込みや議会、行事参加のスケジュール調整から質問のための調査研究の手続きや質問原稿の作成まで全て自分でやります。自衛隊の学生の論文発表のようなものですが、年4回議会が開催されますので毎日が調査研究の日々です。現在の主要なテーマは“高齢化社会における地域コミュニティの在り方”でボランティア活動を通じて研究を深めています。



4 超高齢化社会という“国難”と戦う

町内会や隊友会でも市議会議員としての活動でも最も感じるのが、高齢化の進展です。安倍総理は北朝鮮の核・ミサイルと並んで少子高齢化を“国難”と位置付けています。高齢化は、医療・介護費の増大等将来の日本に悪影響があると心配されていますが、自分自身もいずれその“国難”の対象になるわけですから、何とかこれを克服しなければなりません。自衛隊のまちで任務を終えた自衛隊OBが豊かに暮らせるまち、北の竜宮城を目指して地域活動に頑張っています。

■同窓生は今

今人生、男盛り（23期一その3）

2018.01.19

—人生100年時代における退職自衛官の生き方—

海23期 福本 出



1 ストーム・トゥルーパー？

我々本科23期生は昭和54年3月に卒業し、平成30年度末には防大卒業40周年を迎える。再任用された特例者を除くすべての同期生が自衛隊を辞した今を、私たちは「余生」と呼ぶのだろうか。還暦を迎えたとは言え、誰一人そのような意識は持っていないと思う。

しかし、同期や先輩後輩のクラス会やOB団体の会合等に出席してみると、退職後の生き様は、望むと望まざるにかかわらず各人各様であり、退職後の人生に対する意識の隔たりは、時間が経つほど大きくなっていることを感じるのである。

「UNIFORM」という言葉どおり、自衛官は同じ服装をするだけでなく、敢えて反論を恐れずに言えば、自衛官そのものが即座に取り替えがきくよう教育訓練されてきた“規格品”である。極端な話、人気映画「スター・ウォーズ」に出てくる全身白づくめの装甲をまとい、誰が誰やら個性ないストーム・トゥルーパーになぞらえることもできよう。自衛官としての生涯を通じ、危機管理の名のもと、常に最悪の事態に備え精鋭無比であるよう鍛えぬくと同時に、蓄えた実力が決して使われないことがないようあらゆる面で努力を重ねてきた。ある日、忍耐と緊張の人生に終止符を打って制服を脱ぎ、一人の人間として解き放たれた途端もぬけの殻となり、組織や階級という装甲を喪失した裸の自分がさらされる世間の厳しさを感じたのではないか。

「就活」を経験せず、エスカレーターに乗ったごとく同期が揃って自衛隊に入隊し、そこに準備されていた「A幹1課程（B）出身」という軌道に乗って進んだ防大出身者にとっては、自衛隊を卒業し、制服を脱いで社会の荒波に飛び込むときこそが、ある意味独り立ち人生のスタートなのだ。

「“自分”マイナス“自衛官”＝ゼロになってないか」。これは、副校長、校長として二度にわたり若い世代と親しく対話することができた幹部学校勤務を

通じ、学生たちに力説してきたことである。そして自分自身が退職したいま、その指摘が間違いでなかったことを強く感じるのである。

2 自衛官にとっての人生 100 年時代

昨今、英国の社会学者リンダ・グラットン教授の著書『L I F E S H I F T ～100歳まで生きる時代のワークスタイル』が注目されている。戦後、日本人の平均余命はほぼ10年ごとに2年ずつ延びている。

見方を変えれば、前の10年と比較したとき、1年が14ヶ月、1週間が9日、1日が30時間になったも同じなのだ。人生80年時代の社会常識であった「教育」「勤労」「引退」というライフサイクルが成り立たない時代になったと指摘される。いわゆる“老後”の経済的な現実を目を向けても、もはや年金だけで完全退職後に続く長い時間を安寧に生きることは不可能であり、「生きるリスク」という言葉まで生まれている。“引退後は余生を楽しむ”という時代の終焉である。

防大入校から数えて50代半ばの退職まで制服人生が38年前後として、半数近い同期は自衛隊員ではない人生をより長く生きることになる。この春防大に入校する本科66期生に至っては、“老化”は治療できる症状となり、まさに“100年ライフ”が待っていると言われる。

そこで求められるのは、老後を単に健康で豊かに暮らすということではなく、「いかに長く生産性ある人生を送るか」である。そのために必要とされるのは、金銭などの有形資産だけでなく、「無形資産」が重要となると説かれている。ここにいう「無形資産」とは、①組織や肩書きに依らず生涯の生産性を高める知識やスキルなど個人の価値であり、②長い人生を通じ働き続けるための健康やストレスマネジメント力であり、③個々の人間としてのイノベーション力、自分を変える力だとされる。この三つ目の個人変革力こそが、自衛官OBに問われているのではないかと考える。

3 第一線で活躍するOB

私は退職後、ある小さな防衛産業の研究所長に就任した。私より前からここにいた陸海空各1名の元幹部自衛官について紹介したい。多くの防衛産業と同じく、彼らは、製品が使用される部隊運用や契約調達業務について、会社の技術陣や営業陣にアドバイスする顧問として配置されていた。しかしその実態は、はっきり言って、来る日も来る日も朝から晩まで「ヒマ人」だった。

私はかつて地連部長として退職自衛官の就職援護に携わったとき以来、元自衛官という人材は、実は極めて多種多様な仕事に従事できる柔軟性や適応力があるにもかかわらず、一般にはその真逆に「つぶしがきかない堅物」と思われ

ていることへの歯がゆさを感じていた。そうになってしまう理由は、前項で述べたように、退職する自衛官側が、新しい環境に変貌しきれないということも否めなかった。

私は自分の部下となった元自衛官に、もう一度初心に戻って汗をかくことを説得し、会社の経営陣には、彼らの能力を活用すれば、さらに大きく貢献できることを訴えた。紙面の都合で詳細は省くが、経営陣への上申が認められ、彼らは現在、本来期待されていた自衛隊時代の知識経験に基づく顧問業務に加え、会社のラインに入って期待以上の成果を発揮している。

陸自OBは産業カウンセラーの資格を取得した上で、部下指導統率で培った経験をもって管理職や組合員に講習を行い、全社的な働き方改革の講習を行うとともに、産業医と連携しメンタルヘルス担当官として全社員のカウンセリングを行っている。海自OBは研究所の総務・企画課長として後方支援全般を受け持つとともに、これまで見過ごしてきた防衛省の中期計画に呼応した提案ができるよう中長期計画に取り組んでいる。空自OBは素早い企画力と実行力が買われ、当初は婚活やファミリーイベントなど特命担当をしていたが、今は本社特機品質管理部長と民需品を含む品質保証室長に就任し、本社の要として活躍している。

新聞を隅から隅まで繰り返し読んでいた“ヒマ”な時間はぶっ飛び、彼らの日常は激変し、退職前の隊長職等であったときにも増して忙しく、そして目を輝かせて嬉々として働いている。またその結果として、再就職時に各自衛隊の援護課と約した給料以上の報酬を得るという異例の処遇を得られたことに加え、雇用期間も当初予定よりさらに延長されることにもなった。

当初は「自分の仕事ではない」と未知への挑戦に否定的で尻込みしていた彼らが、「元自衛官の職務」として無意識に自分に課していた殻を破った結果だ。

4 自衛官であったことからの脱却

自分自身の自衛官人生を振り返るとき、「自衛官」という一枚看板を背負いながらも、あるときは船乗りとして船を操り、あるいは教師として教壇に立ち、官僚のようにデスクワークに携わったかと思えば、外交官として外務省に出向するなど、実際にこなしてきたことは転勤のたびに「転職」を繰り返してきたと言っても過言でない、多種多様な職を渡り歩いてきたことに気づかされる。自衛官であったことで備わった柔軟性や対応能力は、いま同じ会社にて第一線で目覚ましい活躍しているOBを見ても確信できる。自衛官は、決して型にはまった規格品ではない。にもかかわらず、社会に出てからその能力が生かし切れずにいる。そういう世の中なのだから仕方ないと、その原因を社会のせいにしていていいのだろうか。

元自衛官が持てる能力を社会において更に活かすためには、極めて逆説的であるが、個々の元自衛官が自己変革を恐れず、自衛官であった殻を破り脱却することから始まるのではないか。

「ぼくは二十歳だった。それが人生でもっとも美しい年齢だったなんて誰にも言わせない」。20世紀初頭に活躍したフランスの哲学者、ポール・ニザンの有名な言葉である。これを振って、こう述べて締めくくりたい。

「ぼくは自衛官だった。それが人生でもっとも美しいときだったなんて誰にも言わせない」と。

■同窓生は今

今人生、男盛り（23 期一その 4）

2018. 01. 19

ーパイロットのLASIK適用についてー

空 23 期 米沢 敬一



平成 24 年 7 月 26 日付を以て航空自衛隊を退職し、俗に言う“まる防企業”にお世話になっております。

退職から 5 年半が経過し、東京で単身赴任継続中（東京への出稼ぎ労働者）です。

今回は貴重な機会を得ましたので、私がライフワーク的に取り組んでいるパイロットあるいは航空従事者への LASIK 適用に係わる正しい知識等の普及についての活動の一端を紹介したいと思います。

私がこうした LASIK に係わる活動に取り組むきっかけとなったのは、現役時代、私の部下のパイロットが視力矯正手術（LASIK）を受けていると言うことで、パイロットの資格を失うという事例があったところから始まっています。

当時パイロットの LASIK は認められておらず、優秀なパイロットとしての実績を持つパイロットの資格を奪うことになったのです。当時の航空自衛隊航空身体検査規則では、「近視矯正手術（放射状角膜切開術等）の既往がないこと。」という基準がありました。相当な飛行経験を持ち、パイロットとして組織の戦力として十分活躍してきて、これからも相当程度、戦力として組織に貢献できるであろうと思われる優秀なパイロットが、その資格を失ったのです。

優秀なパイロットを育てるには長い時間と多額の経費を投入しての教育訓練が必要であり、このパイロットを失うと言うことは、組織にとって大きな損失ではないかという大きな疑問符を持ったのがきっかけです。

そして、たまたま、私の親戚に LASIK をはじめとする視力矯正手術に係わる最新の治療を実施している眼科医療法人の経営に携わる者がおり、またその法人が、米海軍に LASIK を導入するプログラムを主導した有名な海軍の眼科医と技術提携をしていた関係もあって、米軍の視力矯正手術に係わる最新の情報を入手することが出来たことが大きなきっかけでした。

当時米軍では、既にパイロットに対して LASIK の施術が許可されており、

なおかつ国費を投入して軍の病院において無料で施術が受けられるようになっていました。どうして日本の自衛隊ではダメなのかと言う素朴な疑問を持ち、米軍の関連情報を収集するところから活動が始まりました。

航空自衛隊においても、パイロットソースの募集対象の若者の視力低下が問題になっており、航空身体検査合格基準の裸眼視力を0.2まで引き下げるという処置をしておりました。この若者の視力低下傾向は、今後も一段と進むであろうとの考えが一般的となっており、既に飛行隊には眼鏡をかけたパイロットが、珍しくなくなってきていました。一般的には、視力の弱い人は、年齢を重ねる毎に更に視力が低下することはままあることで、毎年実施される航空身体検査でこの視力基準を下回ると航空身体検査不合格となり、パイロットの資格を失うこととなります。長きにわたる組織の投資が無に帰し、組織の戦力低下につながる大きな問題です。

このようなパイロットにLASIKを適用することで、組織の戦力保全がはかれるのです。

既に米軍ではLASIKが許可されているわけですから、自衛隊に導入するのに大きな問題はないと考え、米軍関連の各種資料を収集して衛生官等に提供し、当時の航空衛生担当（眼科医）等の努力により、平成25年に航空自衛隊は、「角膜屈折矯正手術を受ける航空従事者の管理要領に関する試行について」という試行通達を出して、パイロットのLASIK施術に関する道を開くことになったのです。

平成27年には、この通達を更に発展させ陸海空自衛隊で「航空身体検査受験者の角膜屈折矯正手術管理要領に関する試行について」という通達を発出し、これからパイロットコースに入る人たち（20歳以上対象）にも適正な管理の下にLASIKの施術の道が開かれました。20歳以上の防大生においても視力が基準以下であってもLASIKを受けてパイロットの道を目指すチャンスが出来たのです。

航空自衛隊は、来年には三沢基地にF-35戦闘機を受け入れ、部隊建設が始まります。このF-35の特徴は、右の写真にもあるHMD（Helmet Mounted Display）をかぶってヘルメットのバイザー上に映し

出される各種情報を見ながら飛行機を操縦するという、画期的な仕組みになっ



ています。当然こうした装備を扱うには、眼鏡を装着することがハンディキャップになることは容易に想像できると思います。

最大の戦力発揮のためにパイロットが希望すれば、こうしたLASIKの施術が自衛隊の病院等において無料(国費補填)で受けられる環境を整えなければいけない時期が来ているように思います。

米国では、LASIKの次の技術として、ICL((Implantable Collamer Lens)後房型有水晶体眼内レンズ、分かりやすく言えば眼内コンタクトレンズ)手術がすでに海軍や陸軍の兵士(特殊部隊の兵士、空挺部隊の兵士等)に適用が許可され、パイロットをはじめとする航空機搭乗者にも適用すべく研究が進んでいます。数年以内に適用が認められるでしょう。

このICLは簡単に言えば目の中にコンタクトレンズを入れてしまう施術で、LASIKのように角膜を傷つけることもないし、取り出して交換することも出来ると言う進んだ施術です。こうした新しい技術がこれからどんどん開発されていくことでしょう。

パイロットは航空戦力の大きな要素であり、この保全は組織としても積極的に取り組まなければならない事項です。パイロットだけではなく、パイロットをはじめとする眼鏡をかけていることが、戦闘場面で大きなハンディヤップとなるような職域の自衛官(空挺や普通科あるいは航空救難に活躍するメディック等々)には、自衛隊病院等公的な機関で国費によるLASIK(ICLを含む)等の施術が受けられる態勢を整えていかなければならない時代に入っているのではないのでしょうか。



眼科医療法人が実施する相談会を、出来るだけ多くの基地や駐屯地で実施できるように、ボランティア的にサポートをしながら積極的に情報提供に努め、適正な情報をLASIK等を希望する自衛官等に提供できるように活動を続けております。

まだ、しばらく東京での単身出稼ぎ労働者の生活が継続しますが、自己の老眼鏡の度数進行に適切に対応しながら余暇時間を活用してこのような活動を疲れないう程度に続けていきたいと思っています。

■活動報告

第5期生ホーム・カミング・デー・ツアー（HCD2）

2017. 5. 2

ホーム・カミング・デー2（以下「HCD2」）は、卒業式に併せて行われるホーム・カミング・デーと同様に、入校式に同窓生を招待するものです。

HCD2は、國分学校長の発案により昨年（平成28年）から始められた行事で、今回が第2回目となります。初回の本科第64期生等の入校式には第1期生～4期生が招待され、今回の本科第65期生等の入校式には「単独期としては初めて」第5期生が招待されました。今回は、5期生会員、ご遺族、ご家族含め211名が、小原台の若人の城に集いました。

4月5日（水）の入校式当日は、朝から天候にも恵まれ小原台の桜は三分咲きの春らしい陽気で、5期生の役員や防大防衛学教育学群の教授・准教授（制服自衛官）の方々は、7時30分にはそれぞれ配置につき受け入れ準備を完了しました。



入校式当日の防大正門前

入門開始の8時には入校生の父兄等が正門前に長い列を作っていましたが、今回は入校生父兄とHCD2参加者を識別する為に、正門警衛所側の父兄等の入り口とは別に正門右側にHCD2の入口を設定していただき、5期生の案内係と防衛学教育学群職員の指示で入門を待っていた会員の方々もスムーズに入門することができました。正門前にバスやタクシーで到着したHCD2参加者は、案内係の同期生の

顔を見つけては懐かしそうに声をかけたり、本館が新しく立派になっているのに感心する場面もありました。



正門でのご案内



防衛学館へ向かう5期生の方々



受付の状況（陸）



受付の状況（空）



控室での懇談状況（陸）



役員による説明会（海）



役員による説明会（空）

防衛学館へ移動し、陸・海・空の要員ごとの受付を済ませた参加者は、それぞれに割り当てられた控室で久しぶりに再会した同期ごと、奥様方ごとに思い出話や近況報告に花を咲かせておりました。

9時前から、各控室ではHCD2準備委員の方から、今後の行動予定や注意事項の説明があり、その後、防大職員の引率の下、入校式典会場である記念講堂に向け移動を開始しました。記念講堂へ入場する前に、講

堂前の大階段で陸、海、空別とクラス全員での記念写真の撮影を行いました。クラス全員の写真撮影では、國分学校長、19期生の渡邊副校長、28期生の岸川幹事と、入校式に同窓会長名代として参列する岩崎同窓会副会長夫妻が、5期生の方々と和やかに語り合いながらこれに加わりました。



國分学校長を囲んでの5期生参加者全員の記念撮影

入校式会場には防衛大学校のご配慮もあり、第64期本科学学生467名及び研究科学生69名を見渡す会場右側にHCD2参加者全員のために席が用意されており、60年前の自分たちと重ねて懐かしそうに見ているようでした。



入校式会場での5期生の方々

入校式は、１０時に若宮防衛副大臣の臨場、防大儀仗隊による栄誉礼で始まり、国歌斉唱、任命・宣誓・申告に続いて、学校長式辞、防衛副大臣訓示、そして防大２８期生の住田統合幕僚副長による来賓代表祝辞と、滞りなく進められました。



國分学校長の式辞



式場からの拍手に応える５期生の方々

國分学校長の式辞では、副大臣はじめ来賓ご家族に参加のお礼を述べられた後、「６０年前に入校された第５期生の大先輩の方々が、新入生諸君を激励するために、ホーム・カミングデー・パート２と呼ばれる事業で参列されています。防衛大学校の基礎を作り、卒業後は日本の平和と安全のために任務を全うされた５期生の大先輩たちに盛大な拍手をお願いいたします。」と紹介されました。参列している５期生の方々は、会場全体からの拍手に応えて総員立ち上がり頭を下げ謝意を表明しました。学校長からは引き続き、「卒業式の式辞でも紹介させていただきましたが、中村５期生会長が『防大における同期の絆こそが人生最大の宝である。』と語られたことから、これほど卒業生の絆が固く熱い同窓会組織を持った大学は日本には防大以外にないと確信いたします。それは四年間、規律正しい生活の中で勉学・訓練・寝食を共にし、喜びも苦しみもすべて共有しあっているからであり、しかも防大には、将来自衛隊の幹部として、日本と世界のために一生を捧げる覚悟と人格を形成するというきわめて明確な目的があるからです。防大は日本における唯一無二の最高の大学である、そう私は確信しています。」と、新入生に対して防大の素晴らしさを述べられました。そして、新入生には、「六十年後の世界においても、『国家の存在と国家間の対立や紛争』、『グローバル化の進化』、『地球の自然現象等の共通課題の発生』の３つの蓋然性の高い現象においても、自衛隊の任務は重要であ

り、国民や世界から期待も高まるなかで、リーダーとなる君たちには、防衛大学校の4年間の生活で知・徳・体の三位一体の資質を養うために、勉学に、体力錬成に、そして人格形成に励んでもらいたい。」と激励の言葉を贈られ、今回の5期生の大先輩方のように125期生の入校式に参列し、65期の同期の仲間たちと笑顔で再会していることを確信していると、結ばれました。



若宮副大臣の訓示



住田統幕副長の祝辞

入校式後の観閲式までの時間を利用して、5期生の皆さんは榎記念館や在校当時と大きく変わった校内を散策し、観閲式開始時間までには観閲式会場である陸上競技場に再び集って来ました。陸上競技場では、HCD2参加者の為に観閲式が見渡せる場所に席が用意され、暖かくなった青空のもと、新4学年となった第62期生の指揮下で済々と行われる観閲式を懐かしい眼差しで見学しました。



巡閲する國分学校長



榎校長胸像前の5期生



栄誉礼を受ける國分学校長



新入生の 65 期生と観閲行進を見学する 5 期生の方々

5 期生の H C D 2 行事は、観閲式・儀仗隊のファンシードリルの見学をもって終了し、陸上競技上の案内係の学生に見送られて防衛学館に戻りました。

今回、5 期生の皆さんは校内での H C D 2 の行事に引き続き、例年は 6 月頃に行っている 5 期生会総会と懇親会を 1 4 時 3 0 分から横須賀市内のホテルで行うように計画しました。防衛学館に戻った皆さんは、準備委員の方々の誘導に従って準備された臨時バスの待つバス停まで移動し、横須賀市内へと向かいました。



女子学生に見送られて



5 期生会総会に向かい離校する 5 期生の方々とバスへ案内する役員

横須賀セントラルホテルで行われた5期生会総会と、國分学校長、武藤・渡邊両副校長、影浦防衛学教育学群長、岩崎防大同窓会副会長夫妻をお招きした懇親会は大変盛況でありました。

終わりに、今回初めての単独期によるHCD2の実施にあたり、数回にわたる5期生会のHCD2準備委員会開催等、実現に向け最大限の努力を傾注していただいた5期生会担当者の皆様のご労苦に対し心からの慰労と感謝を申し上げますとともに、準備から本番まで親身になってご支援いただいた防衛大学校職員の皆様に心から感謝申し上げます。

(同窓会本部事務局事業部HCD2担当 記)

■活動報告

第41期ホーム・ビジット・デー(HVD)

2017.12. 7

11月11日(土)、12日(日)の両日、防衛大学校において「昇華」をテーマとして平成29年度開校記念祭が開催され、本科第41期生は併せて企画されたホーム・ビジット・デー(HVD)に参加し、同期生との再会の機会を得ることができました。

第41期生は、本科学生への女性の受け入れ(防大女子学生第2期生)等、防大の歴史の中でも象徴的な変化を担う世代として平成5年(1993年)に入校しました。折しも冷戦終結後グローバル化が進展する中、我々は学生時代を過ごしました。卒業後は幹部自衛官として、次第に拡大する国際の場における各種任務の遂行や大規模災害対処に携るとともに、防衛力整備を担う実務者としての役割を担ってきました。また、退職した同期生たちも、様々な分野で頑張っております。

HVDが行なわれた11月12日(日)は朝から晴天に恵まれ、関東・関西・東北各地から卒業生82名、ご家族を含めると174名が防大に集まりました。また、遠くフィリピンから留学生2名がご家族とともに集ってくれました。

当日は、まず第41期生会長堤田君ほか2名の準備組織代表者(中谷君、小林君)による國分良成学校長への表敬を実施しました。期生会長からHVD実施の機会をいただけたことへの謝意を伝えるとともに、学校長からは、最近の防大における取り組みについてご紹介いただきました。



期生会長等による学校長表敬

観閲式は、予め席を準備していただいたおかげで間近に見ることができました。



ご家族とともに来校していた同期生も多く、かつて防大生であった頃の話で盛り上がっている姿が印象的でした。その後、懇親会が行なわれ、大いに旧交を温めることができました。



懇親会の様子



堤田同期生会長による挨拶



レイ・グバンテス、アーノルド・ガサラタン 両フィリピン留学生による挨拶

開校祭祝賀会食終了後、HVD懇親会へご参加いただきました國分学校長からは、我々41期生に対する激励のお言葉と「世界一の士官学校」を目指して取り組んでいることについてのご紹介をいただきました。

また、同様にご参加いただきました杉本同窓会長からも同期の絆や同期生会の意義など貴重なお言葉をいただきました。校内の施設も多くが新しくなり、我々の卒業後20年を経て母校が大きく進化してきていることを感じる事ができました。



國分学校長によるお言葉



杉本同窓会長によるお言葉



女子2期生と学校長との懇談



留学生と学校長との懇談

また、卒業20周年を記念して防衛大学校に「姿見鏡」を贈呈させていただき、すでに2大隊学生舎2階に設置してもらっています。



姿見鏡の贈呈（目録）



応援団リーダー部による逍遙歌

最後は、応援団リーダー部の皆様にリードしていただきながら、全員で肩を組んで逍遙歌、そして一本締め全員で記念撮影を実施して懇親会を終えました。



全員での逍遙歌



全員で記念撮影

懇親会の後は、陸上競技場へと移動し、棒倒し観戦を楽しみました。棒倒しにおいては、41期生の酒井主席指導教官率いる第2大隊が見事に優勝を果たし、会場を大いに盛り上がらせてくれました。



第2大隊優勝に破顔大笑の酒井主席指導教官

こうして第41期生のHVDは幕を閉じました。

(第41期同期生会HVD担当 小林 貴 記)
(同窓会事務局事業部HVD担当 校正)

平成 29 年度防衛大学校同窓会代議員会等（実施報告）

2018. 04. 19

平成 30 年 3 月 3 日（土）明治記念館において平成 29 年度防衛大学校同窓会代議員会・講演会・懇親会が開催され、29 年度の同窓会事業を締めくくることができました。

平成 28 年度・29 年度の同窓会の事業や防大の現況について確認していただくとともに、平成 30 年度の事業計画・検討課題等について貴重なご意見をいただきました。

同窓会の基盤は各期生会・支部にあります。平成 30 年度の代議員会等は平成 31 年 3 月 9 日（土）を予定していますので、各期生会・支部代議員のより多くの参加をお願いします。

1 代議員会 (1330～1550)

代議員 205 名（出席 86 名、委任 119 名）の出席を得て、代議員総数 248 名の過半数以上の代議員会設立要件が満たされました。

代議員会は、以下の次第で実施されました。

- ・ 杉本会長挨拶（18 期海）
- ・ 議長選出
- ・ 諸案審議 平成 28 年度同窓会事業報告・決算報告・会計監査報告
平成 30 年度同窓会事業計画（案）・事業予算（案）
平成 30 年度同窓会役員の選出
- ・ 報告事項 平成 29 年度同窓会事業の実施状況
保安大学校記念碑建立の検討について
期生会の解散（対応）について（中間報告）
「講演会・懇親会」案内状の送付要領の試行について
- ・ 防衛大学校の現状と取組みについて
- ・ 同窓会からのお知らせ

同窓会からのお知らせとして平成 30 年度代議員会等について開催日時等の説明が行われました。



2 講演会（1600～1745）

國分防衛大学校長を講師として、講演会を実施しました。細部については次のとおりです。なお、来年度は櫻井よしこさんで調整中です。

- ・ 講演会講師 防衛大学校長 國分 良成
- ・ 演題「防衛大学校の原点と未来」
- ・ 参加者 250 名



3 懇親会

防衛大学校同窓会の平成29年度懇親会は、平成30年3月3日（土）、代議員会、國分良成防衛大学校長を講師に迎えた講演会に引き続き、明治記念館において開催されました。年に一度開催されるこの懇親会は、全ての同窓会員が参加でき、同期や懐かしい顔ぶれと旧交を温めるとともに、次第に増えてき

た女性会員も含め、年の離れた現職会員とも親交を深めることのできる絶好の機会です。

懇親会は、18期生の杉本正彦同窓会長による挨拶、國分良成防衛大学校長による挨拶並びに防衛大学校主要幹部の紹介、42期生の宇都隆史参議院議員による挨拶に続き、同窓会副会長である21期生の河野克俊統合幕僚長による乾杯で、盛大に開始されました。

今回の懇親会では、来賓を迎えるメインテーブルの他、期ごと26個の丸テーブルに1期生から60期生まで、合計240人が出席しました。久しぶりの同期と学生当時の思い出話から始まり、互いの近況などを報告しあう姿がそこかしこで見られ、はるかに年の離れたOB会員と現職会員が親しげに語り合う姿も散見されました。

大いに盛り上がった懇親会ですが、楽しい時間は過ぎるのも速く、最後は学生歌を全員で声高らかに歌い上げ、今年度の開校祭でHVD（ホームヴィジットデイ）を実施した41期生を代表して小林隆1等陸佐の万歳三唱で締め括りました。

最後になりますが、本懇親会開催に当たりまして、27期生の佐藤正久参議院議員、44期生の中谷真一衆議院議員はじめ多数の祝電、ご芳志を頂いたことに厚く御礼申し上げます。



挨拶を見守る参加



期ごとのテーブル配席



期ごとのテーブル配席



盛り上がる懇親会



盛り上がる懇親会



メインテーブルから同期席



思い出話に近況報告・・・尽きない語らい





肩を組んで？学生歌斉唱



壇上でも学生歌斉唱



声高らかに学生歌斉唱



4 1 期生代表による万歳三唱

■活動報告

第19期生ホーム・カンニング・デー（HCD）

2018. 4. 2

19期生ホーム・カンニング・デー（以下、HCDという。）が、平成30年3月17、18日の両日、平成29年度卒業式典（本科第62期生等）への招待という形で実施され、前日の3月17日（土）、メルキュールホテル横須賀で幕を開けました。

当日は、15時頃から19期生及びご家族が続々と参集し、昔話に花を咲かせるなど、和気あいあいとした雰囲気の中で、まず、期生会総会から始まりました。総会では期生会長の交代（酒井健氏から岩崎茂氏へ）をはじめとするいくつかの議案が満場一致で採択されました。

懇親会は、19期生187名、ご家族84名、総勢271名が集う中、16時30分に國分良成学校長、渡邊啓二副校長（教育担当：19期生として参加）、上尾秀樹幹事、杉本正彦同窓会長等のご来賓が入場され、司会の石橋啓志氏の開会の辞で始まりました。最初に同期生の22名の物故者に対し、「国の鎮め」が流れる中、黙祷が行われ、その後、選出されたばかりの期生会長岩崎茂氏から、久々の再会を祝し、本会の盛会を祈念する挨拶がありました。

次に、来賓を代表して國分学校長から、19期生HCD開催への祝意等のお言葉があり、「HCDは中間地点でありHCD2にも元気で参加してほしい。今日は私服での特外を認める。明日の朝は帰隊遅延のなきように！」など、ユーモア溢れる御挨拶がありました。続いて、19期生HCDの実行委員長である武田壽一氏が「同期多数の参加と防大への感謝」を述べて乾杯し、歓談へと移りました。



挨拶する岩崎期生会長



祝辞を述べる國分学校長



乾杯をする武田HCD実行委員長

会場は久しぶりの再会に皆が喜び合い、同期生同士はもちろんのこと、奥様同士でも会話が弾み、大盛況のうちに進みました。途中、１９期生で放送作家の小島肇氏が作成した卒業アルバムなどを基にしたＤＶＤの映像が流れ、懐かしい場面では関係者の歓声やコメントなども聞かれました。また、１９期生である渡邊副校長が、様々なスライド資料により、防大の生い立ち、１９期生在校当時の状況、現在の教育訓練の様子などを説明され、一同、感銘を受けていました。國分学校長は、精力的にすべてのテーブルを回られ、１９期生諸氏と楽しく歓談され、写真撮影にも応じられていました。

懇親会は、瞬く間に所定の時間が過ぎていき、来賓を含めた全員による肩を組んでの逍遙歌斉唱へと移行し、背景に懐かしい映像が流れる中、大いなる感動とともに謳い上げられました。最後に、倉本憲一氏の防大の発展と同期生の末長い絆を祈念しての万歳三唱の音頭で締められ、懇親会はお開きとなりました。



歓談の状況



学校長との歓談



渡邊副校長による説明



全員で肩を組んでの逍遙歌斉唱



万歳三唱の音頭をとる倉本憲一氏

卒業式当日も前日同様、素晴らしい晴天で、朝８時５０分には１９期生１８８名、ご家族１２７名、総勢３１５名が陸・海・空に分かれて防衛学館のそれぞれの控室に集合を完了しました。その後、防大教官等にエスコートされ、時計台横の階段での全員による記念写真撮影を実施した後、式典参列者が卒業式会場である記念講堂に向かいました。記念写真撮影の際には、お忙しい中にも

かかわらず、國分学校長、渡邊副校長、上尾幹事のご参加をいただきました。



防衛学館内の控室の状況



全員による記念写真撮影

今年も昨年同様、学校側のご配慮により、HCD用として記念講堂内に140席を準備していただきました。なお、記念講堂に入れないHCD参加者は、防衛学館の4つの教場に準備された記念講堂のライブ映像を映し出すスクリーンにより卒業式を見学しました。

卒業式は、予定どおり10時に安倍晋三内閣総理大臣が臨場され、まず、國分学校長から留学生を含む494名の本科卒業生及び66名の理工学・総合安全保障研究科卒業生一人一人に卒業証書が授与されました。

学校長式辞においては、昨年に引き続きHCDについて言及され、「本日の卒業式には、第19期の皆さんが多数参列されています。今日の日本の平和と繁栄は、防大卒業生の皆さんが過酷な条件下で厳しい任務と責任を果たされた賜物であります。崇高な使命を見事に完遂されて、本日無事に帰校された第19期の皆さんに盛大な拍手をお願いいたします。」との言葉に、会場からは盛大な拍手が起こり、その祝福に応え19期生とご家族140名が起立し、敬礼をしました。

また、学校長は式辞の中で「同じ19期卒業生であり、長年教授として防大の学問と教育に尽力され、とりわけ、過去4年間熱情溢れる副校長として、そして慈愛に満ちた先輩として防大生を育て上げ、この3月で退官される渡邊啓二先生」を紹介され、感謝の言葉を述べられました。



式辞を述べる國分学校長



訓示を述べる安倍総理大臣



起立する１９期生



敬礼をして応える１９期生



防衛学館（教場）でのライブ映像による卒業式見学



自衛隊最高指揮官である安倍内閣総理大臣も、訓示の中で昨年同様、ＨＣＤについて言及され、「皆さんも在職中、心ない批判にさらされたかもしれませんが。しかし皆さんは、これに屈することなく、立派に責務を果たし、平和な日本を私たちに引き継いでくれました。事に臨んでは危険を顧みず、身をもって責務の完遂に務め、もって国民の負託に応える。この宣誓の言葉に違（たが）うことなく、常に国民のため、黙々と任務に精励してきた皆さんの姿は、多くの国民の目に焼き付いています。今日、実に９割の国民が自衛隊に良い印象を持っています。これは皆さんの努力のたまものでありましょう。内閣総理大臣として心から御礼申し上げます。卒業生諸君、そして御列席の皆様、大きな仕事を成し遂げ、本日、懐かしき第二の故郷（ふるさと）、ここ小原台に戻ってこられたＯＢの皆さんへ、心からの感謝と敬意を表し、改めて大きな拍手を送りたいと思います。」と述べられ、安倍内閣総理大臣の拍手に合わせて会場の全員から１９期生が再度祝福を受け、一同最大の誇りと感謝で感極まるとともに、ＨＣＤ最大の盛り上がりとなりました。

防衛学館の４つの教場に設置されたスクリーンで卒業式を見学していた１９期生及びご家族も、記念講堂内の雰囲気と同様に、國分学校長のＨＣＤへの言及・拍手及び、安倍内閣総理大臣のＨＣＤへの言及・拍手の際には、盛大な拍手がわき起こり、感謝と感激に包まれました。また、「安倍総理のお言葉は、泣かせるねえ」との声も上がりました。

小野寺防衛大臣の訓示は、「今改めて日本を取り巻く安全保障環境が以前より一層厳しさを増していることを痛感しています」とし、自衛隊員に対するねぎらい、卒業生に対する大いなる期待が込められたものでした。

また、来賓祝辞は、コロンビア大学名誉教授のジェラルド・カーティス氏が、堪能な日本語を駆使してご自分で書かれたものを日本語で述べられました。その趣旨は、インド・太平洋地域の不安定な状況には安全保障上のリスクを低下させるための強固な日米同盟がますます重要性を増してくること、そのためにも、防大卒業生は国際的な視野を広げ、違った視点からモノを見るための語学研修が不可欠と激励されました。



訓示を述べる小野寺防衛大臣



祝辞を述べるジェラルド・カーティス氏



恒例の「帽子投げ」

卒業証書授与、学校長式辞、内閣総理大臣訓示、防衛大臣訓示、来賓祝辞と進んだ卒業式も、卒業生代表の答辞、「学生歌」斉唱と続き、卒業生代表の「解散」の発声により、恒例の「帽子投げ」が行われ、12時少し前に、予定どおり終了しました。

卒業式終了後から任命宣誓式の開始までの間に、記念講堂横の顕彰碑において19期生代表による顕彰碑献花式が厳粛に執り行われました。参列者は、HCD行事に参加した中から約80名であり、顕彰されている同窓全殉職者100柱（19期生に殉職者なし）に対して、岩崎会長等による献花ののち参列者全員で黙祷・拝礼を捧げました。



顕彰碑献花式



候補生と握手し、退場時、HCD席に一礼する安倍総理大臣



その後、陸・海・空それぞれの真新しい制服に着替えた卒業生が整列して待機する中、安倍内閣総理大臣が臨場し、12時30分に一般幹部候補生の任命宣誓式が開始されました。まず、山崎幸二陸上幕僚長、村川豊海上幕僚長、丸茂吉成航空幕僚長が、陸上・海上・航空の各要員を、陸・海・空曹長及び一般幹部候補生にそれぞれ任命し、その後、陸・海・空幹部候補生全員で宣誓を行い、陸・海・空の各代表が安倍内閣総理大臣に宣誓書を手渡し、握手を交わしました。19期生からは、「内閣総理大臣に宣誓書を手渡すようになったのだ」との感嘆の声が聞かれました。

任命宣誓式終了後、陸上競技場において3学年以下の在校生による観閲式が行われました。観閲式には卒業式史上初となるブルーインパルスによる観閲飛行も行われ、観閲式に花を添えました。19期生は陸上競技場の一角に設けられたHCD専用の席で観閲式、観閲飛行、観閲行進を見学し、整齊とした学生たちの姿に当時の自分を重ねるとともに、惜しみない拍手を送っていました。

2日間での参加者は、19期生206名、ご家族132名、総勢338名に及び、観閲式見学をもって19期生HCDのすべての行事は終了、武田実行委員長長の号令で解散しました。

この後、希望者は事前に示されていた4つのグループに分かれ、第1大隊から第4大隊の学生舎を見学しました。各学生舎では、指導官及び各学年の学生が小グループごとに研修を担当し、19期生やご家族からの質問にも親切に答えてくれていました。現在の学生舎は19期生が在学した当時と同じ各学年混在の8人部屋に戻っていますが、女子学生や多くの留学生の存在など状況はずいぶん異なり、また住環境は当時と比べゆったりとして格段に良くなっており、時代の流れを実感しているようでした。



観閲式場のH C D席の状況



整列する学生隊



巡閲する小野寺防衛大臣



ブルーインパルス編隊飛行



解散を宣言する武田実行委員長



学生舎の見学

最後に、１９期生H C Dの実施に向け、２年前から準備を進められた実行委員長以下実行委員の皆様のご活動に対して心からの慰労と感謝を申し上げますとともに、１９期生H C Dの準備から実施に至るまで懇切丁寧にご支援いただきました防衛学教育学群長をはじめとする防衛大学校職員の皆様に心から感謝を申し上げます。

(同窓会本部事務局事業部H C D担当記)

■連絡事項

平成 2 8 年度防衛大学校同窓会決算書

平成 2 8 年度 一般会計収支計算書

平成 2 9 年 3 月 3 1 日現在 【単位：円】

区分	事 業 等			2 8 年度予算額	2 8 年度決算額	差 異	備 考	
一 般 会 計	収 入	同窓会費			21,889,000	24,285,900	2,396,900	60 期 351 名、個別 42 名
		預貯金利息・国債利金			1,369,000	1,455,371	86,371	国債利息増、国債買換え益
		雑収入			1,352,000	1,242,820	-109,180	懇親会会費等
		収入合計（①）			24,610,000	26,984,091	2,374,091	
	支 出	母校の充実・ 発展への寄与	1	新入生に対する講話	5,000	0	-5,000	
			2	第 4 学年に対する講話	5,000	0	-5,000	
			3	各種競技会支援	480,000	784,028	304,028	カッター、水泳、断郊大会
			4	期生会発会等支援	600,000	601,350	1,350	
			5	学生の部隊実習支援	1,010,000	1,011,215	1,215	
			6	顕彰碑顕花式支援	340,000	458,267	118,267	
			7	開校記念祭支援	2,340,000	2,041,407	-298,593	支援金
			8	校友会対外活動支援	1,000,000	909,704	-90,296	
			9	学術向上策支援	170,000	172,260	2,260	
			10	同窓会著作等の寄贈	50,000	0	-50,000	
			11	留学生学業基盤整備支援	440,000	360,000	-80,000	留学生 18 名
			小 計（②）		6,440,000	6,338,231	-101,769	
		会員相互の 親睦交流	12	同窓会ホームページの運営	330,000	294,854	-35,146	年間サポート費等
			13	会員の慶弔業務	700,000	386,205	-313,795	物故者数 93 名
			14	各種競技大会による交流	250,000	181,700	-68,300	テニス・ゴルフ・囲碁
			15	地域支部等への助成	700,000	278,648	-421,352	北陸・東北・徳島・東海・大分 （５コ支部）３万円／支部
			16	卒業留学生との交流	230,000	0	-230,000	
			17	H V D 支援	320,000	304,973	-15,027	40 期
			18	H C D ２ 支援	200,000	269,836	69,836	１～４ 期
			19	H C D 支援	430,000	374,781	-55,219	18 期
			20	講演会・懇親会の実施	3,800,000	4,257,674	457,674	案内状、会場使用料、懇親会費 等
			小 計（③）		6,960,000	6,348,671	-611,329	
		社会活動 への寄与	21	安全保障講座支援	100,000	100,432	432	
			小 計（④）		100,000	100,432	432	

	会務運営基盤 の充実	22	代議員会の実施	800,000	819,421	19,421	返信用葉書、交通費等
		23	同窓会名簿の維持	60,000	44,890	-15,110	
		24	期生会名簿の作成支援	40,000	10,216	-29,784	
		25	地域支部等の設立支援	500,000	130,580	-369,420	
		26	会費納入の促進	650,000	349,355	-300,645	
		小 計 (⑤)		2,050,000	1,354,462	-695,538	
	検討事項	27	防大「高みプロジェクト」 への貢献の在り方検討	25,000	0	-25,000	
		28	同窓会名簿の在り方検討	25,000	0	-25,000	
		小 計 (⑥)		50,000	0	-50,000	
	維持管理	事務費		600,000	665,987	65,987	
		通信費		350,000	258,124	-91,876	
		交通費		450,000	471,910	21,910	
		会議費		200,000	187,272	-12,728	
		事務員雇用費		1,330,000	1,320,000	-10,000	
		事務所賃貸費		5,340,000	5,324,923	-15,077	
		小原台事務局運営費		150,000	91,232	-58,768	
		小 計 (⑦)		8,420,000	8,319,448	-100,552	
	支出計 (⑧=②+③+④+⑤+⑥+⑦)			24,020,000	22,461,244	-1,558,756	
	予備費 (⑨)			590,000	0	-590,000	
	支出計 (⑩=⑧+⑨)			24,610,000	22,461,244	-2,148,756	
収入総計 (①)			24,610,000	26,984,091	2,374,091		
支出総計 (⑩)			24,610,000	22,461,244	-2,148,756		
次年度への繰り入れ額 (⑪=①-⑩)			0	4,522,847	4,522,847		

期生会長・代議員名簿(平成30年4月1日現在)

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏 名	要員	陸:氏 名	海:氏 名	空:氏 名	氏 名	要員
1	深山 明敏	陸	陸井 益三	藤井 勝利	田中 憲明	大東 信祐	陸
2	吉崎 格	陸	吉崎 格	石原 公夫	大庭 肇	高岩 利彦	陸
3	西元 徹也	陸	稲見 達之	手塚 正水	出口 哲夫	野本 眞二	陸
4	田中 厚彦	空	金田 孝之	藤岡 榮	原田 武久	藤田 健作	陸
5	福地 建夫	海	三浦 天士	富 一郎	齋藤 賢爾	浅野 勇蔵	陸
6	阿部 英輔	陸	池田 勝	福塚 啓二	星野 元宏	福塚 啓二	海
7	佐々木 英嗣	陸	吉田 公道	高木 基博	村木 裕世	藤尾 秀治	陸
8	尾頭 誠	空	懸 昇一	植松 秀昭	目良 恂	高田 知行	空
9	磯島 恒夫	陸	小島 捷利	長崎 嘉徳	日高 久萬男	吉橋 誠	陸
10	長谷川 語	海	嶋野 隆夫	坂東 勝昭	川田 哲雄	嶋野 隆夫	陸
11	石川 亨	海	洞澤 佳廣	竹村 訓	赤羽 益三	阿保 文敏	陸
12	金田 秀昭	海	水口 勇	藤田 泰夫	橋本 康夫	藤田 泰夫	海
13	内山 好夫	空	篠田 芳明	新宮領 篁	花岡 芳孝	宇都宮 靖	空
14	奥村 快也	陸	寄田 修	斎藤 隆	稲葉 憲一	有井 一弘	空
15	林 直人	陸	瓦谷 育夫	平山 為祥	江口 啓三	佐藤 誠喜	陸
16	折木 良一	陸	石川 由喜夫	橘 恒紀	堀 好成	石川 由喜夫	陸
17	赤星 慶治	海	廣瀬 誠	赤星 慶治	永田 久雄	石村 澄雄	海
18	火箱 芳文	陸	植木 美知男	谷村 文雄	長尾 齊	植木 美知男	陸
19	酒井 健	陸	師岡 英行	武田 壽一	下平 幸二	風間 敏榮	陸
20	佐藤 貞夫	陸	西村 智聡	加藤 耕司	渡邊 至之	今井 恵治	陸
21	小野田 治	空	渡邊 隆	山本 高英	秦 啓次郎	山崎 剛美	空
22	宮下 寿広	陸	田原 昭彦	松下 泰士	福井 正明	宮寄 泰樹	陸
23	岩本 豊一	陸	藤井 貞文	福本 出	中島 邦祐	岩崎 親裕	陸
24	櫻木 正朋	陸	武内 誠一	原田 哲郎	半澤 隆彦	武内 誠一	陸
25	高鹿 治雄	海	岡部 俊哉	池田 徳宏	吉田 浩介	徳丸 伸一	海
26	尾上 定正	空	深津 孔	堂下 哲郎	尾上 定正	山口 浩樹	空
27	小林 茂	陸	小林 茂	副島 尚志	丸茂 吉成	小林 茂	陸
28	田浦 正人	陸	田浦 正人	畠野 俊一	遠目塚 進	田浦 正人	陸
29	馬場 邦夫	陸	中村 浩之	中尾 剛久	長島 純	時藤 和夫	空
30	堀切 光彦	陸	山崎 繁	時久 寛司	竹平 哲也	山崎 繁	陸
31	前田 忠男	陸	山口 和則	今村 靖弘	後藤 雅人	山口 和則	陸
32	阿部 睦晴	空	池田 頼明	梶元 大介	柴田 利明	植村 茂己	空
33	中塚 千陽	空	山根 寿一	齋藤 聡	沖野 克紀	沖野 克紀	空

期	期生会会長		代議員			業務幹事	
	氏 名	要員	陸:氏 名	海:氏 名	空:氏 名	氏 名	要員
34	佐藤 信知	空	大谷 勝司	大西 哲	小笠原 卓人	小笠原 卓人	空
35	稲月 秀正	空	戒田 重雄	伍賀 祥裕	吉村 一彦	熊谷 三郎	空
36	寺崎 隆行	陸	松永 浩二	石巻 義康	寺崎 隆行	松永 浩二	陸
37	宇佐美 和好	空	小川 隆宏	浦口 薫	宇佐美 和好	宇佐美 和好	空
38	石井 浩之	空	森本 康介	濱崎 真吾	霜田 豊英	山崎 武志	空
39	湯下 兼太郎	陸	湯下 兼太郎	平田 利幸	中川 一	湯下 兼太郎	陸
40	清水 徹	海	梨木 信吾	川野 邦彦	石引 大吾	兵庫 剛	陸
41	堤田 和幸	海	小林 貴	堤田 和幸	中谷 大輔	堤田 和幸	海
42	武田 和克	陸	武田 和克	中尾 喜洋	山口 嘉大	武田 和克	陸
43	鎌田 淳	空	澤 繁実	戸永 竜太	志津 雅啓	志津 雅啓	空
44	高橋 秀典	海	鈴木 攻佑	阿部 直樹	原田 理	阿部 直樹	海
45	青山 佳史	陸	庄司 秀明	岡澤 智和	坂田 靖弘	庄司 秀明	陸
46	田村 弘範	海	石岡 直樹	近藤 太郎	寺林 洋平	向 康司	海
47	吉水 憲太郎	陸	清田 裕幸	笠原 健治	中里 悠花	清田 裕幸	陸
48	和田 嵩一	海	桐谷 高弘	柏木 祐一郎	齋藤 真吾	柏木 祐一郎	海
49	山上 剛史	空	納谷 知希	小沼 洋祐	山上 剛史	山上 剛史	空
50	吉井 拓也	陸	益田 一字	八木 佑己	阿部 竹浩	益田 一字	陸
51	鬼塚 勇	陸	鬼塚 勇	林 大佑	森嶋 倫	鬼塚 勇	陸
52	成田 優	陸	成田 優	岡田 航	荒木 敬	成田 優	陸
53	濱田 卓	空	江嶋 宏次	松崎 圭祐	来栖 克則	濱田 卓	空
54	金澤 慧人	空	角丸 公康	垣内 隼斗	内藤 昌孝	金澤 慧人	空
55	若月 豪	陸	若月 豪	中村 知哉	加治 政樹	若月 豪	陸
56	松尾 聡一郎	陸	松尾 聡一郎	田中 結貴	舟津 貴正	松尾 聡一郎	陸
57	我妻 国明	陸	久保 翔平	松村 駿明	大藪 秀斗	我妻 国明	陸
58	河合 真	海	秋島 一弥	浦山 修太郎	河野 健	河合 真	海
59	屋代 昌也	陸	渡邊 一生	馬渡 淳司	宮川 啓一	屋代 昌也	陸
60	浜野 広大	陸	田村 洋人	畠山 尚己	庄司 和正	今尾 友哉	陸
61	久米井 勇馬	空	池上 好古	神作 友陽	工藤 将人	伊藤 龍二	海

同窓会本部役員名簿(平成30年4月1日現在)

職 名	氏 名		期別	要員	備 考
会 長	杉本	正彦	18	海	
副 会 長	千葉	徳次郎	21	陸	
	曾我	真二	21	海	
	岩崎	茂	19	空	
	河野	克俊	21	海	統 合 幕 僚 長
理 事 (事 務 局 長)	田中	敏明	23	陸	
理 事 (事務局長 補佐)	永井	昌弘	25	陸	
理 事	矢野	一樹	22	海	
	古賀	久夫	24	空	
	森下	久	24	空	防 大 教 授
	尾崎	義典	32	空	統 幕 総 務 部 長
	柿野	正和	34	陸	陸 幕 監 理 部 長
	乾	悦久	31	海	海 幕 総 務 部 長
	荒木	哲哉	31	空	空 幕 総 務 部 長
会 計 監 事	藤井	貞文	23	陸	
	福盛	裕一	22	陸	
	島田	正登	22	海	
	早坂	正	23	空	

地域支部等役員名簿（平成30年3月6日現在）

所属支部	役 職	氏 名	期	要員
北海道地域支部	支部長	加藤 幸治	14	陸
	事務局長	篠原 賢治	34	陸
東北地域支部	支部長	赤坂 徹	17	陸
	業務幹事	浅川 紀明	25	陸
栃木地区支部	支部長	大内 伸浩	10	陸
	事務局長	正岡 富士夫	15	空
群馬地区支部	支部長	石橋 輝治	5	陸
	事務局長	小島 健二	14	空
北陸地区支部	支部長	濱谷 隆平	6	陸
	事務局長	西川 清	15	陸
鳥取地区支部	支部長	吉岡 元	10	空
	事務局長	山本 洋	21	陸
島根地区支部	支部長	桑原 寿之	5	陸
	事務局長	持田 佳郎	13	陸
東海地区支部	支部長	赤谷 信之	13	陸
	事務局長	横山 昌宏	22	陸
関西地域支部	支部長	大久保 博一	12	陸
	事務局長	大島 龍一朗	31	陸
岡山地区支部	支部長	高橋 正憲	6	空
	業務幹事	永岑 富彦	10	陸
広島地区支部	支部長	加藤 紀夫	15	海
	事務局長	土肥 弘実	25	海
山口地区支部	支部長	前田 房彦	13	空
	事務局長	山下 重夫	16	陸
四国地域支部	支部長	今村 功	15	陸
	事務局長	高木 照男	21	陸
徳島地区支部	支部長	福田 忠典	11	陸
	事務局長	清水 祥人	12	陸
香川地区支部	支部長	宇草 茂	18	陸
	事務局長	高木 照男	21	陸
高知地区支部	支部長	今村 功	15	陸
	事務局長	川田 公一	16	空
愛媛地区支部	支部長	瀬川 紘一郎	10	海
	事務局長	森川 建司	22	陸

所属支部	役 職	氏 名	期	要員
九州地域支部	支部長	木崎 俊造	20	陸
	事務局長	末廣 治之	21	陸
福岡地区支部	支部長	木崎 俊造	20	陸
	事務局長	末廣 治之	21	陸
佐賀地区支部	支部長	福井 秀平	23	陸
	事務局長	福岡 龍一郎	26	陸
長崎地区支部	支部長	高橋 理一	16	海
	事務局長	大平 慎一	20	海
熊本地区支部	支部長	山下 高憲	17	陸
	事務局長	長尾 民穂	19	陸
大分地区支部	支部長	清末 純博	16	海
	事務局長	佐藤 文明	16	空
宮崎地区支部	支部長	大岐 継寛	15	陸
	事務局長	金丸 直史	19	空
鹿児島地区支部	支部長	石崎 耕太郎	16	陸
	事務局長	兒玉 健二郎	22	陸
沖縄地域支部	支部長	松川 和秀	20	空
	事務局長	金子 賢太郎	55	空
小原台クラブ	会長(支部長)	長谷川 礼司	17	空
	事務局長	及川 正稔	28	陸
桜華会	会長(支部長)	塚口 千枝(平松)	40	陸
	事務局長	島津 悠加(黒田)	45	空

同窓会本部事務局員名簿(平成30年4月1日現在)

事 務 局 長			田中	敏明	23	陸
事 務 局 長 補 佐			永井	昌弘	25	陸
総 務	部 長		川上	幸則	25	陸
	補 佐	総 務	増田	潤一	26	陸
		新規事業	山本	克也	26	海
	担 当	総 務	星指	隆	27	陸
		新規事業	小坂	明彦	27	海
	事務局管理(常勤)		坂尾	陽子		
人 事	部 長		内山	哲也	25	海
	補 佐		平川	善人	25	空
			石丸	安蔵	26	海
			篠田	充哉	26	空
	担 当		黒木	忠広	27	海
			穂積	文孝	27	空
経 理	部 長		大倉	育信	25	空
	補 佐		池畠	暢也	26	空
	担 当		藤永	映章	27	空
事 業	部 長		山下	繁生	25	陸
	補 佐	HCD/FVD	荒関	和人	26	陸
		囲碁/留学生	小松	栄登	26	陸
		テニス/助成(正)	伊藤	正顕	26	海
		テニス/助成(副)	小島	昌二	26	海
		ゴルフ/講演	中村	雅樹	26	海
	担 当	HCD/HVD	渡部	誠司	27	陸
		HCD2	清水	隆	27	海
		囲碁/留学生	安藤	哲夫	27	海
		テニス/助成	大居	一之	27	陸
		ゴルフ/講演	堀	博幸	27	海
広 報	部 長		堀井	克哉	25	陸
	補 佐	人材バンク	佐藤	修	26	陸
		機関紙	井田	竜夫	26	空
		H P	住谷	正仁	26	陸
	担 当	人材バンク(正)	長谷川	光成	27	陸
		人材バンク(副)	菅野	茂	27	陸
		機関紙	橋口	裕則	27	空
		H P	花田	順一朗	27	陸
	技術指導		村田	和美	17	陸

同窓会小原台事務局員名簿(平成 30 年 4 月 1 現在)

小原台 事務局	事務局長		坂本	浩一	34	空
	局長代理		中澤	信一	28	海
			関口	高史	32	陸
	局長補佐		森迫	隆文	31	陸
			和田	靖	36	陸
			内田	貴司	28	空
			宮島	麻衣	53W	陸
	事務局員	総括	中澤	信一	28	海
		総括補佐	宮崎	基	31	海
			関口	高史	32	陸
			山口	直人	32	空
		H C D 担当	甘中	晴彦	33	海
			中野	昌英	41	陸
		H V D 担当	和泉	憲昌	41	空
		陸 O B 担当	染谷	真次郎	43	陸
		海 O B 担当	瀧川	雄一	40	海
		空 O B 担当	高橋	秀幸	30	空

■電子版「小原台だより」の発刊にあたり

平成29年度機関誌「小原台だより」は、ホームページにご投稿頂きました方々及び取材に応じて頂きました方々のお蔭をもちまして無事発行することが出来ました。

この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

第23号から電子版としての発行を開始致しましたが、今回の第25号で電子版第3号を発刊する運びとなり、電子版として軌道に乗りつつあるものと考えています。

編纂に当りましては、ホームページのアーカイブとしての記録保存の意義を重視しつつも、全体のデータ量を考慮してスリム化を追求したため、同窓会としての年度の活動を主体とした記事を中心として取捨選択致しましたことにご理解を賜りますとともに、引き続き電子版「小原台だより」のご愛顧をよろしくお願い申し上げます。

(防衛大学校同窓会本部事務局長 記)